祖堂集の本文研究 (一)

柳田聖山

まえがき

一、祖堂集に親しみ始めて、既に十年の歳月が過ぎた。當初、内外の諸先輩の御指導の下に、本文をプリントしてテキストを作り、毎週數回、有志で定期的に會讀し、かたわらカードをとりつつ本文の訓讀を進めた。一方、京大の東方文化研究所、現在の人文科學研究所の宗教研究室でも此の書の會讀がとり上げられて、入矢義高先生を中心に、塚本善隆、木村英一、藤吉慈海、島田虔次等の諸先生や、今は駒澤大學の禪宗辭典編集主任に轉じている篠原壽雄兄等の研究班に加えて頂くことができたが、何ぶんにも、私にとつて此の朝鮮本獨特の、異體や略字の頻出する白文テキストは、始めは全く暗號を讀解するような狀態であつた。一道の光明は、宇井伯壽博士の禪宗史研究三冊で、博士が、各所に引用されている本文の句讀に教えられ、又本書が禪宗史研究の基礎資料として、極めて重要なものだとされる博士の見方に斷えず導かれた。又、祖堂集には敦煌資料に散見する特殊な文字や語句に共通するものが多いのも一つの魅力で、處女峯をねらう登山家の夢にも似た、若い無謀な冒險慾にかられて、とに角强引に讀み進んだが、尤も力づけられたのは、何と言つても當時本學の禪宗學を擔當していられた坂本靜一先生の强引極

まる指導方法であつた。まがりなりにも、とに角全卷を讀み終えることができたのは、全く先生の御鞭撻のお蔭である。今すでに定中の人となられた先生に再び敎えを乞えぬのは、かえすがえすも殘念であり、且つはその後の不勉强を反省させられている。今回、幸いに三十八年度の文部省科學研究費による援助を受けることが出來たので、不充分乍ら、とり敢えず一應の成果をまとめ、本文研究に關する部分を發表することにした。

一、周知のように、祖堂集は現に朝鮮海印寺にその版木が完全な形で遺存し乍ら、從來その摺本の全く知られなかつた逸書の一つで、特に明治以前の我が國で讀まれた形跡は絕無である。此のような希覯の書が、我々の共有財產となつたのは、本學敎授緒方宗博先生の御好意である。先生は、恰も十餘年前、本學が新制大學として新しく出發したのを記念して、御秘藏のものを圖書館に寄せられたのであるが、此の本は摺りが古く、もと海印寺住持の林玄鏡師の所持本であつた由緒の一部である。今回、此の研究の發表に際して、更めて心から學恩に感謝申し上げたいが、又特に先生は本書の本文研究の仕事を、先年來、先生が海外の專門學者と連絡をとりつつ進めていられる禪錄英譯計畫の一部に加えられて、準備費若干を與えられた。幷せ深謝申し上げる次第である。

一、今回の發表は次のような計畫によるものである。

1、解題、及び全體に亘る歷史的な考察に關する研究は、既に本誌の第四十四號(昭和二十八年)に、「祖堂集の資料價値」なる一文を發表しているので、舊稿との重複を避けて、先づ完全な形の本文の決定を急ぐこととする。

2、從つて、內容的な考察は、舊稿に續く傳燈錄の成立に關する研究とともにとりまとめ、別途發表の計畫とする。

3、本文は、最終的なテキストを決定するべく、先づ段落と句讀を加え、原書に頻出する特殊字體を、すべて通用の活字體に改めるが、特別のもの以外、その頻度の多いものは繁を避けるため一一註記せず、全卷に亘る略字表を別に作製する。例えば、↓興、與取↓最 の如きものである。但し、本書獨自の用字法と見られるもの、例え

ば、摩＝磨＝麽、嵓＝岩＝巖、笨＝策、の如きは改めず、すべて原形を保存した。

4、明かに原本の誤りと思われるものは、註記して改め、蝕欠や判讀不能のものは、適當と思われる文字を補い、その旨を註記する。

5、右に本づく訓讀文。

6、語句、事項等に關する註解、特に出據資料に關する考證的な問題を、出來る限り詳しく究明する。

7、右の成果による口語譯、從來の訓讀法は、原文の含畜ある深みを保存はするが、意味理解について明確さを欠く點があるので、本研究では特に、最も適當な解釋と考えられるものによつて、前後一貫する通解を掲げた。

8、テキストは、先年、本學で出版した謄寫分冊覆印本によつて、頁數を記入し、檢出の便をはかつた。

一　(分Ⅰ—1)テキスト第一分冊一ページの意、以下之に準ずる。

祖堂集序　　泉州招慶寺主淨修禪師文僜述。夫諸聖興來、曲收迷子。最上根器、悟密旨於鋒鋩未兆之前、中下品流、省玄樞於機句已施之後。根有利鈍、法無淺深。矧乎聖人雖利生而匪生、聖人雖興化而寧化。苟或能所斯在、焉爲利濟之方。然遺半偈一言、蓋不得已而已。言教甚布於寰海、條貫未位於師承。常慮水涸易生、烏馬難辨。今則招慶有靜筠二禪德、袖出近編。古今諸方法要、集爲一卷、目之祖堂集。可謂珠玉聯環、卷舒浩瀚。既得奉味、但覺神清。仍命余爲序、堅讓不獲、遂援毫直書。庶同道高仁。勿以譏誚。乃錄云爾。

鋒は、原本に鋒。

祖堂集の序

泉州招慶寺主、淨修禪師文僜(ぶんとう)述ぶ

夫れ諸聖の興り來るや、曲さに迷子を收む。最上の根器は、密旨を鋒鋩未兆の前に悟り、中下の品流は、玄樞を機句已に施すの後に省す。根に利鈍有るも、法に淺深無し。矧乎、聖人利すと雖ども、生にして而も生に匪ず、聖人興ると雖ども、化して而も寧んぞ化せん。苟も或は能所斯に在らば、焉んぞ利濟の方を爲さんや。然るに、半偈一言を遺すは、蓋し已むを得ざるのみ。言教甚だ寰海に布くも、條貫未だ師承に位せず。常に慮る、水涸の生じ易く、烏馬の辨じ難きことを。今、則ち招慶に靜・筠の二禪德有つて、近編を袖由す。古今諸方の法要を集めて一卷と爲し、之を祖堂集と目く。謂つ可し、珠玉聯環し、卷舒浩瀚なりと。既に奉味することを得て、但だ神の淸きを覺ゆ。仍つて、余に命じて序を爲らしむ、堅讓するも獲ず。遂に毫を援つて直ちに書す。庶くは、道を同じうするの高仁、以て譏誚したもうこと勿れ。乃ち錄して爾か云う。

祖堂集　解題はすでに前稿の「祖堂集の資料價値」（禪學研究第四十四號）の中で論じたから、此處にくり返さぬが、中國の文獻で本書に關する記述は、目下のところ絕無である。宇井博士が、第三禪宗史研究の、中華傳心地禪門師資承襲圖の佚文について（四八六ページ）、の中で指摘される智禮の十不二門指要抄や、四明教行錄の事例も、恐らく直接に此の書を指したものではなかろうし、又、大惠の正法眼藏一之下に、洞山聰禪師が集むる所の禪門宗要と祖堂の二錄、と云う祖堂錄なるものも時代的に明かに別のものである。もと中國撰述（後述のように、朝鮮の開版者匡佛は、明かに中華の集と云つている）の筈の此の書が、中國に何の痕跡も留めず、ただ朝鮮にのみ存したことは極めて不思議であり、更に又、景德傳燈錄以下の宋代の燈史類の書が、内容的に此の書を承けているに拘らず、此の書について何の記載も殘さぬことも奇である。目下のところ、本書と傳燈以後の諸書が共により古い同一の資料に基づきつつ、後者が前者の存在を知らなかつたと見る外はないが、兩者が共に寶林傳を承けていることは事實である。然し、既に前稿で指摘したように、傳燈錄の成立に最も關係の深かつた楊億（964—1020）が師事した首山下の廣慧元璉（951—1036）は、曾て泉州で祖堂集の序者である招慶文僧に師事したことがあり（羅湖野錄下）、元璉は祖堂集を知つていたのではないかと思われる。元版傳燈錄の末尾に遺存する長樂の鄭昂（大惠下の居士）が、紹興壬子（1132）に附した跋に見える奇怪な說話と共に、傳燈錄成立の史實を探る一つの鍵であるかも知れぬ。又、林間錄上によると、楊億は「佛祖同源集」なるものの編者であ

り、また羅湖野錄下には、彼が汝陽禪會集十三卷を編したとも云い、その序の一部を掲げて居るが、それによると共に同一性質の編著であつたらしく、當時、祖堂集に似た燈史の書が、この派の人々によつてしきりに作られていた事實が知られる。ともあれ、祖堂集は何かの理由で中國佛敎史上から葬り去られた不幸な逸書である。我々は本書が朝鮮に現存する事實を記念し、朝鮮の發音に從つて、codang-chip と呼ぶべきかも知れぬ。

泉州招慶寺主淨修禪師文僧　五代の南唐時代、泉州（福建省晉江縣）の招慶寺の住持で、雪峯義存（822—908）——保福從展（—928）——文僧と承けた人。本書の卷第十三に、福先招慶和尙、傳燈錄卷第二十二に、泉州招慶院省僧淨修大師の名で、簡單ながら章があり、省僧とも呼ばれたらしい。淨修禪師は恐らく生前の勅贈で、傳燈二十九には、別に招慶省僧眞覺大師頌二首を收めるから、眞覺大師が寂後の諡號であろう。年壽は傳わらぬが、泉州招慶の外、福先、及び千佛（院）の兩所に開法したらしく、祖堂集には數所に福先及び千佛の名で拈弄の語が收められ、別に敦煌文書中に、泉州千佛新著諸祖師頌（S. 1634）一部があり、初祖大迦葉尊者以下三十三祖、及び惠能大師下の數人について頌して居り、此等の頌は祖堂集の夫々の章の末尾にも收められている。兩者の本文の異同、及び頌が成立するに至つた史實等については、すでに前記の舊稿に私見を述べておいた。

最上根器　祖師禪が上根の器を對象とすることは、敦煌本六祖壇經に、此は是れ最上乘の法にして、大智上根人の爲めに說く、少根智の人は若し法を聞くも、心に信を生ぜず、何を以ての故ならば、譬えば大龍の如く、若し大雨を下すとき、閻浮提に雨ふらせば、草葉を漂わす如く、若し大雨を下すとき、雨大海に放てば、增さず減ぜず……衆生本性般若の智も、亦復た是の如し、少根の人の此の頓敎を聞說するは、猶お大地の草木の、根性自から少なる者は、若し大雨に一沃せらるれば、悉く皆な自ら增長する能わざるに到るが如し云々と云い、傳燈三、達磨の章に、（般若多羅）尊者曰く、汝法を得ると雖も未だ遠遊すべからず、且らく南天に止まり、吾が滅後六十七歲を待つて、當に震旦に往き、大法藥を設け、直ちに上根を接すべし、とあり、同じく第十一卷の仰山の章に、若し是れ祖宗門下ならば、上根上智、一聞千悟して大總持を得んも、此の根の人は得難し、とある。又、臨濟錄に三種の根器を分つことは有名。

品流　部類。グループ。

玄枢　根本。樞機のこと。元樞とも云う。

機句　師家の機と言句。修行者を道く方便の手だて。投機の機である。道忠の葛藤語箋卷二の慧通門、及び卷三の動作門に、夫々、機を投ず（修行者の側より）、機に投ず（師家の側より）の別を辯じている。

根有利鈍法無淺深　禪門撮要所收の四行論、第二十二心品利鈍別相門に、問うて曰く、何をか利根と名づけ、何をか鈍根と名づくる

や、答えて曰く、師の教に由らず、事に從つて法を見る者を名づけて利根と爲す、師の言教に從つて解を得る者を名づけて鈍根と爲す。師の言教に從つて法を聞くに、亦た利根と鈍根と有り、師の言を聞いて有に着せず、卽ち無生を取らざる者は、此れ利根の人なり、解を貪つて義に着し、是非等の見を取るは此れ鈍根の人の解義なり云云、と見え、敦煌本檀經（第三九段）に、法は卽ち一種なるも、見に遲疾有り、見遲なれば卽ち漸、見疾なれば卽ち頓なり、法に漸頓無きも、人に利鈍有り、故に漸頓と名づく、とあるのが參考せられる。又、宗密の禪源諸詮集都序に、法に漸頓無く、頓漸は機に在り、とする說がある。

雖利生而匪生……　衆生利益のために此の世に生れたと言つても、本來生の生とすべきなく、教化を興しても、教化の跡を留めぬ。利生教化の空なるを言つたもの。

半偈一言　一言半句。簡潔な短い教え。言葉にならぬ言葉。雪山に半偈を聞く故事とは別。

言教　說法。增一阿含四十七に、如來世尊に何の言教か有る（T. 2, 805 b）と有り、又法華方便品の始めに、吾れ成佛より已來、種々の因緣、種々の譬喩もて廣く言教を演べ、無數の方便もて衆生を引導し、諸の若を離れしむ（T. 9, 5c）、と見える。

條貫未位於師承　師から弟子への法系の順に秩序を立てて居らぬ。條貫は、すじが貫き通ること。條理が立つていること。

水涸　水がれ。本書阿難の章（I—37）に、若し人生くること百歲なるも、水潦の涸るるを見ずんば云云、とあり、又第二十七祖般若多羅の章（I—63）に、恒に水涸を嗟く、とある。ここでは禪の生命の絕えること。

烏馬難辨　よく似ていて見分け難いこと。烏の字と馬の字とは、似ているために寫し誤り易い意。烏焉馬と成る、とも云う。

靜筠　祖堂集の二人の編者の名は、これ以上に知られない。曾て、石井光雄氏が、筠なる人は淸涼文益の法嗣で、金陵淨德道場の達觀智筠ではなかろうか、假りにそうであるとすると智筠は宋の開寶二年（969）に六十九歲で寂した人である（禪の講座第四卷「禪の書」所收の「禪と典籍」p. 429）と云われ、最近には水野弘元氏が、或は此の二人は、靑原七世の法孫たる襄州谷隱智靜（傳燈二十一）と、同じく襄州石門慧徹（傳燈二十三）の弟子石門筠（八世）とではないかと思われる（駒大・宗學研究第二号所收の「傳法偈の成立について」p. 39 a）とされるが、何れも積極根據はない。むしろ、私は本書自體の卷四、藥山の章の終りに近い所で、雲岩と道吾の兄弟二人が互いに相い助けつつ、藥山と百丈の二師の間を往來して、最後に共に藥山に嗣ぐに至る長い苦修の物語を掲げた末尾に、眞覺大師と玄晤大師の拈語を附錄して、「此は是れ龍花の擧なり、若し祖堂の擧に依れば」、と夾注して、同じく雲岩と道吾の切磋琢磨の、異つた機緣を掲げて居り、又曾て宇井博士が、第三禪宗史研究の洞山語錄の基づいた資料について論ぜられた中で、洞山に關する資料が祖堂集に極めて多く保存されている事實を指摘されていることも考え合せると、本書の編者は、雲岩、洞山の系統に親しい入唐朝鮮僧でなかつたか、と考えている。前記の眞覺大師龍花もまた、朝鮮僧である。

袖出　とり出す。袖の中からひそかに出す意。以下はその近編の内容を述べたもの。この訓み方は多少不自然で、或はまた、袖出は抽出の誤りで、近編と古今諸方の法要を抽出し云云と讀むべきかも知れず、此の場合の近編は、文僧自身の「千佛新著諸祖師頌」のことと見る方がよいかも知れぬが、今はなるだけ原本に從うこととする。

珠玉聯環　多數の珠玉が糸でつながつて環になつていること。

卷舒浩瀚　讀みごたえのあること。ボリュームのある書物。浩瀚は、本來は水の流れの廣大なること。轉じて、文章の豐なこと、途方もなく大きいこと。

奉味　手にとつて味うこと。細やかに親しむ意。

遂　そこで。すぐに。現代語の「遂に」の意ではない。

いつたい、諸聖が此の世に表われ來つて、すべての迷える人々を餘すことなく濟いたまうと云うが、素質の尤もすぐれた人々は、自から人間の世の深い道理を、諸聖が教えの鋒先すら動かさぬ前に一擧に悟つてしまうのに對して、中下の部類の人々は、諸聖が設けてくれた手だてや教えの言葉によつて、漸く究極の眞理に達する。然し、人々の素質には利鈍の別があつても、道理そのものに淺深は無い。まして、聖賢たちは生きとし生ける人々を利益するために、此の世に生れたもうと云つても、それはすでに不生の生であり、また化身として假りの姿を現すと云つても、單に化身に盡きるものではない。だから苟くも、教える人と教えられる人との關係が、本當はこういうものである以上、どうして衆生濟度の方便を固定的なものと考えることができよう。

然らば、古の聖人たちが半偈一言を遺してくれたのは、思うに全く已むを得ず、そうせずには居れなかつたからであろう。今日、古聖人たちの教えはおびただしく四海に廣がつているが、それらは未だ師より弟子への整然たる秩序づけをもつてはいない。私はいつも恐れている、丁度ときとして水がれが生じたり、烏と馬の字が轉寫のうちに見分けられぬようになることがあるように、せつかくの古聖の教えが、何時か見失われてしまいはせぬかと。ところが今、我が泉州招慶院では某靜と某筠の二人の禪德が、新しい編纂を完成された。それは古今各地の宗匠たちの教えの精要を集めて

一卷の書とし、祖堂集と名づけたものである。此の書はまことに、珠玉が環に連ねられたように見事であり、編集の内容も極めて豐かである。私は親しく味讀し了つて、全く精神のすがすがしさを覺えた。それで、一編の序を書くように依頼されて、むげに斷ることも出來ぬままに、とり敢えず筆をとつて書きつけた次第である。どうか、道を同じうする諸賢の、お叱りを頂けるようにお願いするばかりである。

二 (分I－1)

已上序文、幷祖堂集一卷、先行此土、尓後一卷齊到。謹依具本、爰欲新開印版、廣施流傳、分爲二十卷。以此先寫七佛、次艐天竺二十七祖、幷諸震旦六代。代有傍正、祖位次第、並以錄上。隨其血脉、初後聯綿、佋穆之儀、有孫有嫡也。其纂成、所以群英散說、周覽於眼前、諸聖異言、獲瞻於卷內。今以沙門釋匡傳所冀、中華集者、永祛惜法之痕。此界微曹、願斆弘禪之美、深漸洞徹、乞恕愆疣。

艐は、原本に膢で、狂病の意。諸橋大漢和に、舟に從う膢は別字とある。冀は、原本では冀。後者は字書に見當らぬ。漸は、原本は慚で、意を通じ難い。愆疣は、原本に愆疣。愆は愆とも書き、愆の俗字。疣は、疣、又は痙と同字で、此處では意を通じ難い。

已上の序文、幷びに祖堂集一卷は、先に此土に行われ、尓の後の一卷齊しく到る。謹んで具本に依つて、爰に新に印版を開き、廣施流傳せんと欲し、分つて二十卷と爲す。此を以て、先づ七佛を寫し、次に天竺二十七祖、幷びに諸の震旦の六代に艐る。代に傍正有り、祖位は次第するも、並びに以て錄上す。其の血脉に隨つて、初後聯綿し、佋穆の儀もて孫有り嫡有るなり。其の纂成するや、群英の散說をして周ねく眼前に覽せしめ、諸聖の異言をして卷內に瞻るを獲しむる所以なり。今以るに、沙門釋の匡傳、翼う所は、中華の集もて永く惜法の痕を祛わん。此界の微曹、

願わくば弘禪の美を敷んで、深く漸んで洞徹せんことを。乞うらくは愆愆を恕せよ。

已上序文……　以下の文章は難解である。恐らく、朝鮮高麗朝の高宗卽位三十二年（1425）、分司大藏都監の匡俌が、出版に際して添えたものらしい。「以上の序文と、祖堂集の一卷とが、すでに此土（朝鮮）に行われ、その後更めて一卷が一度に到來した」と云うとき、先の一卷と後の一卷との關係はどうなるのか。一卷は、恐らく一まとめの書卷の意で、それまでは今日の如き二十卷の分卷などは無かったのであろうが、後の一卷が一度に到來したというからには、此の時始めて完全なものが揃ったのであり、先のものは、或は略本だったのであろうか。

分為二十卷　此の記事に從う限り、現在見られる分卷は、朝鮮の開版者が行ったもので、それまでは袤然たる一堆紙だったらしい。

以此　それで。以是に同じ。

先寫七佛　七佛、及び七佛の偈は、祖堂集の創唱である。その資料、及び歷史的意義については、本文の相當箇所で考證する。

諸震旦六代　諸の字は不自然であるが、六代の複數形に應じたものか。震旦は、言うまでもなく中國のことで、古くインドの佛敎徒が用いた言葉。Cina-sthāna の音寫の略。振旦、眞丹などとも書き、支那の原語であるという。

代有傍正　夫々の世代に正系と傍系があること。例えば、本書第三卷は牛頭和尙（法融）を以て始まり（p. 101）、以下、牛頭系統の人々を傳し終って、已上は空宗と注し（p. 108）、次で、五祖忍大師の下に傍出する一枝は、神秀和尙、老安國師、道明和尙にして、神秀の下に普寂、普寂の下に嬾瓚和尙、南岳に在り、として懶瓚和尙の樂道歌を掲げて居り、更に、老安國師、騰騰和尙、破竈墮和尙を傳し終って、已上は北宗と注して居り（p. 111）、此等の注記は恐らく朝鮮で開版の時に添えられたものであろう。但し、代に正傍を分つ考え方そのものは、神會が開元二十年（732）に、滑台の大雲寺で、北宗を攻擊した時に始めて主張したるもの。

血脈　血すじ。親から子への血統。本來は血管の意であるが、血脈を傳法相承の意に用いたのは、恐らく中唐の密敎に起り、これを承けた六祖以後の中國禪門のそれが最初であろう。歷代法寶記に、東都沙門淨覺師有り、是れ玉泉神秀禪師の弟子なり、楞伽師資血脈記一卷を造る（T. 51. 180b）、と云い、歷代法寶記自身も、亦た師資衆脈傳と名づく云云（：179a）と稱して居り、その他、南宗馬祖系の血脈論一卷や、我が最澄の內證佛法相承血脈譜の作のあることは、周知の通りである。

佋穆之儀　尊卑の秩序の意。正しくは昭穆と書く。古代宗廟の制に、太祖の廟は中央の北側にあって南面し、二世・四世・六世は東側にあって西面し、三世・五世・七世は西側に在って東面したことから、宗廟の順位の不變なることを言ったもの。

群英散説　すぐれた人々の、種々様々の論説。多くの名論卓説。本書卷第十五、鷲湖和尚の章に群英十号の語があり、菩提達磨嵩山史蹟大觀に收める唐太宗御書少林寺碑にも同じ例がある。

沙門釋匡俊　傳記は殘念乍ら判らないが、海印寺の麗版再雕に當つて、分司大藏都監に任ぜられた人。俊は儁と同じく俊の別字。本書卷三、騰騰和尚の章に收める「樂道歌」に、不在辯才聰儁（一―二〇）とある句を、傳燈錄三十の「了元歌」では不要辯才聰俊（T. 51, 461b）としているのが參照される。高麗朝に於ける大藏經再雕の事業は、第二十三主高宗の二十三年（1236）より三十八年（1251）に至つて完成したもので、時恰かも蒙古軍が半島の全土を侵寇し、十九年（1232）には王室は都を開城から江華島に移して、かろうじて命脈を保つ狀態であつたが、佛敎は王室や貴族階級の敎養として、日常生活の全般に浸透して居り、大藏經の再雕は彼等の護國事業の一つであつた。特に當時、政權を專横していた崔氏一門は代々の崇佛家で、佛敎によつて國難を乗り切ろうという祈念から此の仕事を計畫した樣で、後代の史家からは佞奸の評を受け、高麗史では叛逆傳中に立傳されているが、とにもかくにも、國を擧げて蒙古の支配下にありながら、此の千古未曾有の大業を完成したのは崔氏の功である。高麗史第百二十九、崔怡傳に左の記事がある。

王詔に曰く、晉陽公崔怡は、聖考が登極の日に當り、寡人が卽祚してよりこのかた、誠を推して社を衛り、德を同じうして理を佐く、辛卯（1231）を越えてより、邊將守りを失い蒙兵闌入するや、神謀獨り決して群義を裁斷し、躬ら乘輿を奉じて地をトして遷都し、數年ならざる間に宮闕官廨悉く皆な營構し、憲章復た振つて再び三韓に造らしむ、且つ歷代傳うる所の鎭兵の大藏經版は、盡く狄兵に焚かれ、國家多故にして未だ重ねて新たにする暇あらざるとき、別に都監を立てて私財を傾け納れ、彫板幾んど半ばならんとす、邦家を福利するの功業忘れ難し、嗣子侍中沆は家業を遹追し、君を匡けて難を大藏經板に制し、財を施し役を督し、成るを告げて慶讚す云云

嗣子侍中沆というのは、崔怡の孼子で、始め出家して萬全と稱した人である。元來、晉陽公崔怡には二人の孼子があり、共に出家して、萬全、萬宗と稱したが、萬全は後に還俗して朝に入つたのであり、萬宗の方は、禪門拈頌集の刊行者、斷俗寺萬宗として知られる人である。萬全の崔沆が、右のような經歷をもち、再雕大藏の完成に大きい役割りを果していることから推して、再雕大藏の補版として、分司大藏都監が雕造した祖堂集の序文の附記に、その名を留めている沙門匡俊もまた、或は崔氏の一族であつたかも知れぬ。

所冀　此の二字は難解。强いて、「こいねがわくは」の意に解するが、次の文章に續き難い。

微曹　ものの數にも入らぬ輩。謙辭である。曹は、朋輩、つれ、の意。本來は、役人、かかりの意で、或は直接には分司大藏都監の

職にある人の意を表わしたものかも知れぬ。

惜法　法を貪ること。聲聞二乘の根性の意。

愆疣　あやまち。過失。愆尤とも書く。原本の疣は、いぼの意で、恐らく不可であろう。

以上のような序文を伴つた祖堂集なる一部の書は、已に前から我が朝鮮の地に知られていたが、その後、更に一まとめになつたものが傳えられたので、此の度、謹んで完全なテキストに基づいて新たに印刷に附し、廣く世の中に送り出そうと考えて、全體を二十卷に分つこととした。先づ始めに七佛の章を收め、次で天竺の二十七代、及び震旦の六代に及ぶことにする。すべて、世代毎に正系と傍系の區別を立て、祖師たちの世代に順じて、編成してある。じつさい、血脉相承の順序通りに、終始聯綿と連續し、宗廟の序列のように秩序正しく、孫や嫡子が夫々に關係づけられている。此の書の編成こそは、すぐれた人々の多くの卓説を餘すことなく眼のあたりに眺め、古聖たちの夫々に特色ある教えを、一書の中に伺い見ることができるというものである。今や、わたくし、沙門釋の匡俊が願い上るところは、此の中國禪宗の教えの集大成によつて、法をいつまでも自分だけのものにしておくような聲聞根性を拂い捨てようということである。そして又、此の世界の尤も愚かな自分でも、何とかして禪の法を世に弘めるという此の大業に參ずることによつて、次第に眞理の奥底に深く徹しようと思うのである。どうか過失の點はお許し頂き度い。

三　(分Ⅰ—2)

一一上名次第如後、

第一毗婆尸佛、　第二尸棄佛、　第三毗舍浮佛、　第四拘留孫佛、　第五拘那含佛、　第六迦葉佛、　第七釋迦佛、

第一大迦葉祖釋尊傳金襴袈裟、現在鷄足山、令迦葉持此衣、待彌勒出世、分付此衣。傳衣爲信也。第二阿難祖、第三商那和修、第四優婆毬多、第五提多迦、第六彌遮迦、第七婆須密、第八佛陀難提、第九伏陀密多、第十脇祖師、第十一富那夜奢、第十二馬鳴尊者、第十三迦毗羅祖師、第十四龍樹祖師、第十五提婆祖師、第十六羅睺羅、已上七佛、并西天二十三祖第一卷畢。

第十七僧伽難提、第十八伽耶舍多、第十九鳩摩羅、第二十闍夜多、第二十一婆修般頭、第二十二摩拏羅、第二十三鶴勒祖師、第二十四師子比丘、第二十五婆舍斯多、第二十六不如密多、第二十七般若多羅、第二十八初祖達摩、第二十九祖惠可、第三十祖僧璨、第三十一祖道信、第三十二祖弘忍、第三十三祖慧能、已上、天竺并震旦六代、衣鉢相傳事跡畢初祖傍出、道育惣持第二卷畢。

四祖下傍出、慧融第一、智嚴第二、慧方第三、法持第四、智威第五、慧忠第六、前智威下出、馬素和尚、馬素下出、道欽和尚、道欽下出、鳥窠和尚、已上九人則空宗也五祖下傍出、神秀和尚、安國師、道明和尚、前神秀出、普寂和尚、普寂下出、嬾瓚和尚、老安下出、騰騰和尚、坦然和尚、破竈墮、已上八人則北宗也六祖下出、思和尚、荷澤和尚、忠國師、崛多三藏、智策和尚、本淨和尚、一宿覺和尚、讓和尚、已上八人、第四十一代第三卷已畢。

思和尚下出、石頭和尚、忠國師下出、耽源和尚、已上二人四十二代、石頭下出、天皇和尚、尸利和尚、丹霞和尚、招提和尚、藥山和尚、第四卷已畢。

大顚和尚、長髭和尚、已上七人、四十三代天皇下出、龍潭和尚、丹霞下出、翠微和尚、藥山下出、雲巖和尚、華亭和尚、椑樹和尚、道吾和尚、大顚下出、三平和尚、長髭下出、石室和尚、已上八人、四十四代龍潭下出、德山和尚、第五卷已畢。

翠微下出、投子和尚、圓禪師下出、宗密禪師、雲巖下出、神山和尚、洞山和尚、道吾下出、漸源和尚、石霜

和尚、　第六卷已畢。

花亭下出、夾山和尚、已上八人、四十五代、　德山下出、巖頭和尚、　雪峯和尚、　第七卷已畢。

洞山下出、雲居和尚、　欽山和尚、　中山和尚、　曹山和尚、　華嚴和尚、　本仁和尚、　青林和尚、　踈山和尚、

龍牙和尚、　幽捿和尚、　夾山下出、上藍和尚、　第八卷畢。

落浦和尚、　盤龍和尚、　逍遙和尚、　洞安和尚、　黃山和尚、　韶山和尚、　石霜下出、捿賢和尚、　大光和尚、

肥田和尚、　涌泉和尚、　南際和尚、　雲蓋和尚、　九峯和尚、　南嶽泰、　寶蓋和尚、已上二十八人、四十六代　巖頭下出、玄

泉和尚、　烏臼和尚、　靈岳和尚、　羅山和尚、　第九卷已畢。

雪峯下出、玄沙和尚、　長生和尚、　鵝湖和尚、　大普和尚、　鏡清和尚、　翠岳和尚、　報恩和尚、　化度和尚、

鼓山和尚、　隆壽和尚、　安國和尚、　長慶和尚、　第十卷已畢。

保福和尚、　雲門和尚、　齊雲和尚、　永福和尚、　福清和尚、　潮山和尚、　惟勁和尚、　越山和尚、　睡龍和尚、

雲居下出、　佛日和尚、　水西和尚、　曹山下出、中曹山和尚、　金峯和尚、　鹿門和尚、　第十一卷已畢。

荷玉和尚、　育王和尚、　華嚴下出、紫陵和尚、　長興和尚、　龍牙下出、報慈和尚、　踈山下出、後踈山和尚、　九

峯下出、禾山和尚、　寶峯和尚、　光睦和尚、　同安和尚、　沈潭和尚、　雲蓋下出、後雲蓋、　玄泉下出、黃龍和

尚、　羅山下出、龍光和尚、　龍迴和尚、　清平和尚、　玄沙下出、中塔和尚、已上四十七人、四十七代　長慶下出、仙宗和尚、

第十二卷已畢。

後招慶、　報慈和尚、　保福下出、龍潭和尚、　福先招慶、　山谷和尚、已上五人、四十八代　第十三卷已畢。　已上九十六人、

石頭下法孫。

次辨江西下、　六祖能大師下出、讓和尚、四十一代　讓和尚下出、馬祖、四十二代　馬祖下出、大珠和尚、　百丈政、　杉

山和尚、 茗溪和尚、 石鞏和尚、 紫玉和尚、 南源和尚、 百丈和尚、 魯祖和尚、 高城和尚、 章敬和尚、
第十四卷已畢。
西堂和尚、 鵝湖和尚、 伏牛和尚、 盤山和尚、 麻浴和尚、 鹽官和尚、 五洩和尚、 大梅和尚、 永泰和尚、
東寺和尚、 鄭隱峯、 歸宗和尚、 汾州和尚、 大同和尚、 金牛和尚、 龜洋和尚、 陳禪師、 黑礪和尚、 魔
巖和尚、 龐居士、已上三十一人、四十三代 第十五卷已畢。
南泉和尚、 百丈下出、 溈山和尚、 黃蘗和尚、 西林和尚、 古靈和尚、 性空和尚、 第十六卷已畢。
大慈和尚、 西院和尚、 西堂下出、 處微和尚、 海東陳田、 海東桐裏、 海東實相、 章敬下出、 海東慧目山、
公畿和尚、 鹽官下出、 關南和尚、 海東崛山、 盤山下出、 普化和尚、 麻浴下出、 海東聖住、 大梅下出、 天龍和
尚、 五洩下出、 正原和尚、 歸宗下出、 芙蓉和尚、 南泉下出、 岑和尚、 白馬和尚、 下堂和尚、 海東雙峯、
第十七卷已畢。
趙州和尚、 紫湖和尚、 陸亘大夫、已上二十七人、四十四代 溈山下出、 仰山和尚、 第十八卷已畢。
香嚴和尚、 鴻諲和尚、 靈雲和尚、 王敬初敬、 黃蘗下出、 臨濟和尚、 觀和尚、 陳和尚、 西院下出、 大隋和
尚、 靈樹和尚、 堯山和尚、 關南下出、 道吾和尚、 天龍下出、 俱胝和尚、 紫湖下出、 勝光和尚、已上十四人、四十五代
仰山下出、 資福和尚、 第十九卷已畢。
海東順之、 王常待下出、 米和尚、 臨濟下出、 寶壽和尚、 灌溪和尚、已上五人、四十六代 灌溪下出、 後魯祖、 隱山和尚、
興平和尚、 米嶺和尚、第四十七代也 第廿卷已畢。
海東新開印版祖堂集。現其本迹者、二百五十三員、幷載於二十卷內。莫知迹者、不能具錄矣。

現は、原本に見。璨は、原本のまま。璨の俗字である。素を、プリント本で祖としているのは誤り。笑は、原本のまま。策の俗字

である。捿は、原本のまま。嚴密には棲が正しい。以下も同じ。嵒も原本のまま。岩、又は巖の俗字。烏嵒は、傳燈以下ではすべて瑞巖である。今、原本による。又、中は、原本に仲。本文に中となっているのに従う。汐は、原本のまま。泐の略字。敬は恐らく衍字であろうが、しばらく原本に従う。聯燈八に、襄州常侍王公敬の例がある。灌溪和尚の次に、本文には興化和尚の章あり、従つて、已上五人四十六代の夾注も訂正を要する。嶺は、原本に領。

一一の上名の次第は後の如し、

		(祖堂集分冊本のページ數)	(傳燈錄の相當卷數、及び大正藏のページ數)
1	第一毗婆尸佛	一-7	一・204, c 1
2	第二尸棄佛	一-7	一・204, c 9
3	第三毗舍浮佛	一-8	一・205, a 5
4	第四拘留孫佛	一-8	一・205, a 12
5	第五拘那含佛	一-8	一・205, a 19
6	第六迦葉佛	一-9	一・205, a 26
7	第七釋迦佛	一-9	一・205, b 4
8	第一大迦葉祖	一-27	一・205, c 22

釋尊、金襴の袈裟を傳えて現に鷄足山に在つて、迦葉をして此の衣を持して、彌勒の出世を待ち、此の衣を分付せしむ。傳衣を信と爲すなり。

9	第二阿難祖	一-34	一・206, b 7
10	第三商那和修	一-35	一・206, c 25
11	第四優婆毬多	一-37	一・207, b 1

12 第五提多迦 1-39 1・207, c 14
13 第六彌遮迦 1-40 1・208, a 16
14 第七婆須密 1-42 1・208, b 11
15 第八佛陀難提 1-42 1・208, c 2
16 第九伏陀密多 1-44 1・209, a 2
17 第十脇祖師 1-45 1・209, a 16
18 第十一富那夜奢 1-45 1・209, b 11
19 第十二馬鳴尊者 1-47 1・209, c 1
20 第十三迦毗羅祖師 1-47 1・209, c 29
21 第十四龍樹祖師 1-48 1・210, a 29
22 第十五提婆祖師 1-48 1・211 b 2
23 第十六羅睺羅 1-49 1・211, c 12
24 第十七僧伽難提 1-51 1・212, a 25
25 第十八伽耶舎多 1-52 1・212, c 2
26 第十九鳩摩羅 1-53 1・212, c 20
27 第二十闍夜多 1-54 1・213, b 16
28 第二十一婆修般頭 1-56 1・213, c 19

已上、七佛、并びに西天の二十三祖（1-23、此の數え方は奇である）。第一の卷畢る。

29　第二十二摩拏羅　一-57　二・214, a 29
30　第二十三鶴勒祖師　一-58　二・214, a 29
31　第二十四師子比丘　一-58　二・214, c 7
32　第二十五婆舎斯多　一-59　二・215, a 25
33　第二十六不如密多　一-61　二・215, c 15
34　第二十七般若多羅　一-62　二・216, a 19
35　第二十八初祖達摩　一-63　二・217, a 9
36　第二十九祖惠可　一-77　二・220, b 26
37　第三十祖僧璨　二-81　二・221, c 14
38　第三十一神道信　一-82　二・222, b 2
39　第三十二祖弘忍　一-83　二・222, c 6
40　第三十三祖慧能　一-89　五・235, b 10

已上、天竺幷びに震旦の六代、衣鉢相傳の事跡、畢る。

初祖傍出、

(41)　道育　(無傳)
(42)　惣持　(〃)

第二の巻畢る。

四祖の下に傍出する、

43 慧融第一 (1) 一-101 (牛頭和尚) 四・226, c 26 (潤州法融)
(44) 智嚴第二 (2) (無傳) 四・228, b 9
(45) 慧方第三 (3) (〃) 四・228, c 2
(46) 法持第四 (4) (〃) 四・228, c 15
(47) 智威第五 (5) (〃) 四・228, c 25
(48) 慧忠第六 (6) (〃) 四・229, a 17

前の智威の下に出づる、

49 馬素和尚 (7) 一-106 (鶴林和尚) 四・229, b 28

馬素の下に出づる、

50 道欽和尚 (8) 一-106 (先径山和尚) 四・230, a 11

道欽の下に出づる、

51 鳥窠和尚 (9) 一-107 四・230, b 3

已上の九人 (43-51) は、則ち空宗也。

五祖の下に傍出する、

(52) 神秀和尚 (1) (無傳) 四・231, b 12
(53) 安國師 (2) (〃) 四・231, c 1
(54) 道明和尚 (3) (〃) 四・232, a 1

前の神秀より出づる、

(55) 普寂和尚(4)　(無傳)

普寂の下に出づる、

56 嬾瓚和尚(5)　一-108 (懶瓚和尚)　三十・461, b 15 (南山嶽懶瓚和尚歌)

老安の下に出づる、

57 騰騰和尚(6)　一-110　四・232, c 5 及び三十・461, b 6 (洛京福先寺仁倹禪師)

85 坦然和尚(7)　一-110 (実は老安国師の章)　四・前出

59 破竈墮(8)　一-111　四・232, c 22

已上の八人 (52-59) は則ち北宗也。

六祖の下に出づる、

60 思和尚(1)　一-111 (靖居和尚)　五・240, a 17

61 荷澤和尚(2)　一-112　五・245, a 15

62 忠國師(3)　一-113　五・244, a 7

63 崛多三藏(4)　一-130　五・237, a 13

64 智策和尚(5)　一-130　五・243, c 14 (婺州玄策禪師)

65 本淨和尚(6)　一-132　五・242, b 19

66 一宿覺和尚(7)　一-139　五・241, a 27 (温州永嘉玄覚禪師)

67 讓和尚(8)　一-142 (懷讓和尚)　五・240, c 7

已上の八人 (60-67)、第四十一代。　第三の巻、已に畢る。

思和尚の下に出づる、

68 石頭和尚(1)　一-147　十四 309, b 1

忠國師の下に出づる、

69 耽源和尚(2)　一-155　十三 305, b 1

已上の二人、四十二代。

石頭の下に出づる、

70 天皇和尚(1)　一-156　十四 309, c 17

71 尸利和尚(2)　一-157 (尸梨)　十四 310, b 20

72 丹霞和尚(3)　一-157　十四 310, b 23

73 招提和尚(4)　一-167　十四 311, a 28

74 藥山和尚(5)　一-168　十四 311, b 16

第四の巻、已に畢る。

75 大顛和尚(6)　二- 1　十四 312, c 26

76 長髭和尚(7)　二- 4　十四 313, a 25

已上の七人 (70-76)、四十三代、

天皇の下に出づる、

77 龍潭和尚(1)　二- 6　十四 313, b 10

丹霞の下に出づる、
78　翠微和尚(2)　二－ 8　十四・313, c 7

藥山の下に出づる、
79　雲巖和尚(3)　二－ 9　十四・314, c 24
80　華亭和尚(4)　二－ 18　十四・315, b 19（華亭船子德誠禪師）
81　椋樹和尚(5)　二－ 22　十四・315, b 29
82　道吾和尚(6)　二－ 23　十四・314, a 11

大顛の下に出づる、
83　三平和尚(7)　二－ 27　十四・316, b 20

長髭の下に出づる、
84　石室和尚(8)　二－ 29　十四・316, a 8

已上の八人（77-84）、四十四代。

龍潭の下に出づる、
85　德山和尚(1)　二－ 31　十五・317, b 13

第五の卷、已に畢る。

翠微の下に出づる、
86　投子和尚(2)　二－ 37　十五・319, a 2

圓禪師の下に出づる、

87 宗密禪師(3) 二- 43 (草堂和尚) 十三· 305, c 11

雲巖の下に出づる、

88 神山和尚(4) 二- 47 十五· 323, b 26

89 洞山和尚(5) 二- 49 十五· 321, b 20

道吾の下に出づる、

90 漸源和尚(6) 二- 71 十五· 321, b 1

91 石霜和尚(7) 二- 72 十五· 320, c 1

第六の卷、已に畢る。

花亭の下に出づる、

92 夾山和尚(8) 二- 79 十五· 323, c 21

已上の八人(85-92)、四十五代。

德山の下に出づる、

93 巖頭和尚(1) 二- 89 十六· 326, a 10

94 雪峯和尚(2) 二- 99 十六· 327, a 11

第七の卷、已に畢る。

洞山の下に出づる、

95 雲居和尚(3) 二-117 十七· 334, c 15

96 欽山和尚(4) 二-127 十七· 340, a 15

97　中山和尚(5)　二-128　十七・337, a 19
98　曹山和尚(6)　二-129　十七・336, a 4
99　華厳和尚(7)　二-143　十七・338, a 4
100　本仁和尚(8)　二-145　十七・339, b 27
101　青林和尚(9)　二-146　十七・338, b 20
102　踈山和尚(10)　二-149　十七・339, c 19
103　龍牙和尚(11)　二-151　十七・337, b 2
104　幽捜和尚(12)　二-156　十七・338, b 13

夾山の下に出づる、

105　上藍和尚(13)　二-156　十六・332, a 24

第八の巻、已に畢る。

106　落浦和尚(14)　三- 1　十六・331, a 3
107　盤龍和尚(15)　三- 10　十六・332, c 2
108　逍遙和尚(16)　三- 10　十六・332, b 12
109　洞安和尚(17)　三- 11 (先洞安)　十六・333, b 16
110　黄山和尚(18)　三- 12　十六・332, c 6
111　韶山和尚(19)　三- 13　十六・333, a 13

石霜の下に出づる、

112 捿賢和尚(20) 三一 14 十六・329, a 4
113 大光和尚(21) 三一 14 十六・328, c 15
114 肥田和尚(22) 三一 16 (肥田伏) 十六・330, a 22
115 涌泉和尚(23) 三一 17 十六・329, c 6
116 南際和尚(24) 三一 18 十六・328, c 7
117 雲蓋和尚(25) 三一 19 十六・329, c 16
118 九峯和尚(26) 三一 19 十六・329, a 13
119 南嶽泰(27) 三一 28 (南嶽玄泰) 十六・330, c 13
120 寶蓋和尚(28) 三一 29 十六・330, b 2

已上の二十八人(93-120)、四十六代。

巖頭の下に出づる、

121 玄泉和尚(1) 三一 29 (玄泉彦) 十七・341, a 10
122 烏臼和尚(2) 三一 30 十七・340, c 13 (台州瑞巖師彦禅師)
123 靈岳和尚(3) 三一 30 十七・341, a 15
124 羅山和尚(4) 三一 31 十七・341, a 20

第九の巻、已に畢る。

雪峯の下に出づる、

125 玄沙和尚(5)　三一 37　十八・343. c 27
126 長生和尚(6)　三一 43　十八・349, c 25
127 鵝湖和尚(7)　三一 45　十八・350, b 2
128 大普和尚(8)　三一 45　十八・348, b 24
129 鏡清和尚(9)　三一 46　十八・348, c 3 (杭州竜冊寺順德大師道怤)
130 翠嵒和尚(10)　三一 56　十八・352, c 15
131 報恩和尚(11)　三一 57　十八・350, b 24
132 化度和尚(12)　三一 58　十八・350, c 15
133 鼓山和尚(13)　三一 58　十八・351, a 2
134 隆壽和尚(14)　三一 60　十八・351, c 15
135 安國和尚(15)　三一 60　十九・353, b 27
136 長慶和尚(16)　三一 65　十八・347, b 16

第十の巻、已に畢る。

137 保福和尚(17)　三一 77　十九・354, b 22
138 雲門和尚(18)　三一 91　十九・356, b 27
139 齊雲和尚(19)　三一 95　十八・352, a 25 (杭州竜華寺真覚大師靈照)

140 永福和尚(20) 二1-101 十八・352, a 8
141 福清和尚(21) 二1-102 十九・356, b 17
142 潮山和尚(22) 二1-103 十九・359, c 4
143 惟勁和尚(23) 二1-104 十九・360, b 2
144 越山和尚(24) 二1-106 (越山鑒真) 十九・356, a 11
145 睡龍和尚(25) 二1-106 十九・355, c 8

雲居の下に出づる、

146 佛日和尚(26) 二1-109 二十・361, c 11
147 水西和尚(27) 二1-110 (水西南台) 二十・362, c 15

曹山の下に出づる、

148 中曹山和尚(28) 二1-110 二十・364, c 3
149 金峯和尚(29) 二1-111 二十・364, b 3
150 鹿門和尚(30) 二1-112 二十・364, b 12

第十一の巻、已に畢る。

151 荷玉和尚(31) 二1-113 二十・363, c 11
152 育王和尚(32) 二1-116 二十・364, a 17

華厳の下に出づる、

153 紫陵和尚(33) 三-117 二十・365, c 4
154 長興和尚(34) 三-117 相当者なし
龍牙の下に出づる、
155 報慈和尚(35) 三-117 二十・365, a 24
踈山の下に出づる、
156 後踈山和尚(36) 三-118 二十・367, c 2 (踈山証禅師第二世住)
九峯の下に出づる、
157 禾山和尚(37) 三-120 十七・342, c 16
158 寶峯和尚(38) 三-133 十七・342, b 25 (洪州泐潭延茂禅師)
159 光睦和尚(39) 三-133 十七・342, b 8 (吉州南源山行修慧観禅師)
160 同安和尚(40) 三-134 十七・342, b 28
161 汐潭和尚(41) 三-135 十七・342, c 6
雲蓋の下に出づる、
162 後雲蓋(42) 三-135 十七・343, c 2 (潭州雲蓋山景和尚)
玄泉の下に出づる、
163 黄龍和尚(43) 三-136 二十三・391, b 26
羅山の下に出づる、

164 龍光和尚(44) 三-137 二十三: 392, a 5 (洪州大寧院隠微禅師)
165 龍迴和尚(45) 三-139 二十三: 393 c 6 (湖南劉陽道吾山従盛禅師)
166 清平和尚(46) 三-141 二十三: 393, b 19

玄沙の下に出づる、

167 中塔和尚(47) 三-142 二十一: 372, a 22 (福州臥竜山安国院慧球寂照禅師)

已上の四十七人 (121-167) は、四十七代。

長慶の下に出づる、

168 仙宗和尚(1) 三-144 二十一: 376, c 10 (福州僊宗院守玭禅師)

第十二の巻、已に畢る。

169 後招慶(2) 四-1 (招慶) 二十一: 374, b 2
170 報慈和尚(3) 四-9 二十一: 375, a 13

保福の下に出づる、

171 龍潭和尚(4) 四-20 二十二: 382, c 3 (舒州白水海会院如新禅師)
172 福先招慶(5) 四-21 二十二: 382, a 20 (泉州招慶院省僜浄修大師)
173 山谷和尚(6) 四-29 二十二: 383, c 1 (漳州報恩院行崇禅師)

已上の五人 (168-173、實は六人) は、四十八代。

第十三の巻、已に畢る。

已上九十六人（69–173 で、實は百五人）、石頭下の法孫なり。

次に江西下を辨すれば、

六祖の下に出づる、

讓和尚（すでに67に見える）四十一代。

讓和尚の下に出づる、

174 馬祖　四－33（江西馬祖）　六・245, c 23（江西道一禪師）

四十二代。

馬祖の下に出づる、

175 大珠和尚(1)　四－44　六・246, c 8

176 百丈政(2)　四－47　六・248 欄外及び 九・268, b 24

177 杉山和尚(3)　四－48　六・248, a 12

178 茗溪和尚(4)　四－49　六・248, a 27

179 石鞏和尚(5)　四－50　六・248, b 11

180 紫玉和尚(6)　四－53　六・248, c 6

181 南源和尚(7)　四－54　六・249, a 17

182 百丈和尚(8)　四－55　六・249, b 26

183 魯祖和尚(9)　四－65　七・251, c 21

184	高城和尚(10)	四－67	宗鏡錄第九十八、及び禪門諸祖偈頌上之下
185	章敬和尚(11)	四－69	七・252 b 19

第十四の巻、已に畢る。

186	西堂和尚(12)	四－73	七・252 a 12
187	鵝湖和尚(13)	四－74	七・253 a 1
188	伏牛和尚(14)	四－76	七・253 a 24
189	盤山和尚(15)	四－77	七・253, b 8
190	麻浴和尚(16)	四－79	七・253, c 20
191	鹽官和尚(17)	四－80	七・254, a 4
192	五洩和尚(18)	四－81	七・254, b 6
193	大梅和尚(19)	四－85	七・254, c 2
194	永泰和尚(20)	四－87	七・荊州永泰靈湍禪師（無傳）
195	東寺和尚(21)	四－88	七・255, b 15（湖南如會禪師）
196	鄭隱峯(22)	四－91	八・259, b 5
197	歸宗和尚(23)	四－92	七・255, c 24
198	汾州和尚(24)	四－98	八・257, a 1
199	大同和尚(25)	四－101	八・257, b 14

200 金牛和尚(26)　四-101　八・261, b 17
201 龍洋和尚(27)　四-101　八・260, b 29
202 陳禪師(28)　四-103　八・泉州慧忠禪師（無傳）
203 黑礌和尚(29)　四-103　八・262, b 12
204 魔巖和尚(30)　四-103（閉魔岩）　十・280, a 29（永泰靈湍の法嗣、五台山秘魔岩和尚とす）
205 龐居士(31)　四-104　八・263, b 3

已上の三十一人（175-205 實は次の南泉を加えて三十二人）、四十三代。

第十五の卷、已に畢る。

206 南泉和尚(32)　四-107　八・257, b 18

百丈の下に出づる、

207 溈山和尚(1)　四-124　九・264, b 15
208 黄蘗和尚(2)　四-131　九・266, a 3
209 西林和尚(3)　四-137（西林操）
210 古靈和尚(4)　四・137　九・268, a 10
211 性空和尚(5)　四 139（石霜性空）　九・267, b 11

第十六卷、已に畢る。

212 大慈和尚(6)　五- 1　九・266, c 17

213 西院和尚(7) 五— 2 (福州西院) 九· 267, b 20 (福州大安禅師)

西堂の下に出づる、

214 處微和尚(8) 五— 7 九· 269, a 8

215 海東陳田(9) 五— 8 (雪岳陳田寺元寂禅師) 九· 雞林道義禅師 (無傳)

216 海東桐裏(10) 五— 9 (東国桐裏和尚) 九· 新羅國慧禅師 (無傳)

217 海東實相(11) 五— 9 (東国実相和尚) 九· 新羅國洪直禅師 (無傳)

章敬の下に出づる、

218 海東慧目山(12) 五— 9 (東国慧目山和尚) 九· 新羅國玄昱禅師 (無傳)

219 公畿和尚(13) 五— 10 九· 270, a 22

鹽官の下に出づる、

220 關南和尚(14) 五— 11 十· 279, b 24

221 海東崛山(15) 五— 11 (溟州嶫山故通暁大師) 十· 新羅品日禅師 (無傳)

盤山の下に出づる

222 普化和尚(16) 五— 15 十· 280, b 12

麻浴の下に出づる、

223 海東聖住(17) 五— 17 (嵩嶽山聖住寺故兩朝国師) 九· (新羅國無染禅師 (無傳)

大梅の下に出づる、

224　天龍和尚(18)　五－19　十・280, a 18

五洩の下に出づる、

225　正原和尚(19)　五－19　十・279, a 15

歸宗の下に出づる、

226　芙蓉和尚(20)　五－20　十・280, c 23

南泉の下に出づる、

227　岑和尚(21)　五－21　十・274, a 8（湖南長沙景岑禅師）

228　白馬和尚(22)　五－33　十・276, a 29

229　下堂和尚(23)　五－33　十・276, b 11（鄧州香嚴下堂義端禅師）

230　海東雙峯(24)　五－34（雙峯和尚）（新羅國道均禪師）

第十七の卷、已に畢る。

231　趙州和尚(25)　五－37　十・276, c 7

232　紫湖和尚(26)　五－48　十・278, c 15（衢州子湖利蹤禅師）

233　陸亘大夫(27)　五－49　十・279, a 29

已上の二十七人（207-233）は、四十四代。

234　仰山和尚(1)　五－50　十一・282, a 28

潙山の下に出づる、

第十八卷、已に畢る。

235 香嚴和尚(2) 五-81 十一:283, c 27
236 鴻諲和尚(3) 五-93 十一:284, c 9 (徑山洪諲禪師)
237 靈雲和尚(4) 五-95 十一:285, a 23
238 王敬初敬(5) 五-98 (王敬初常侍) 十一:286, a 4

黄蘗の下に出づる、

239 臨濟和尚(6) 五-98 十二:290, a 18-299, b 15
240 觀和尚(7) 五-102 十二:292, c 20 (福州烏石山靈觀禪師)
241 陳和尚(8) 五-104 十二:291, a 20 (睦州竜興寺陳尊宿)

西院の下に出づる

242 大隋和尚(9) 五-107 十一:286, a 16
243 靈樹和尚(10) 五-107 十一:286, b 20
244 堯山和尚(11) 五-108 十一:286, c 21

關南の下に出づる、

245 道吾和尚(12) 五-108 (道吾休) 十一:288, c 4

天龍の下に出づる、

246 俱胝和尚(13) 五-109 十一:288, a 23

紫湖の下に出づる、

247　勝光和尚(14)　五-110　十一 287, c 25

已上の十四人（234-247）は、四十五代なり。

仰山の下に出づる、

248　資福和尚(1)　五-110　十二 298, a 15（仰山下三世）

第十九の巻、已に畢る。

249　海東順之(2)　五-113（五冠山瑞雲寺和尚）　十二 294, a 26

王常侍の下に出づる、

250　米和尚(3)　五-137

臨済の下に出づる、

251　寶壽和尚(4)　五-138　十二 294, c 13

252　灌溪和尚(5)　五-138　十二 294, b 13

（興化和尚、本文に有って、目録に脱す。）五-139（傳燈十二 295, b 1）

已上の五人（248-252、實は六人）は、四十六代。

灌溪の下に出づる、

253　後魯祖(1)　五-140　十二 298 b 7-19

254　隱山和尚(2)　五-141　七 263, a 14（馬祖法嗣、潭州竜山和尚）

255　興平和尚(3)　五-142　七 262, b 14（馬祖の法嗣）

256 米嶺和尚(4) 五-143 七・260, b 3 (馬祖の法嗣)

第四十七代なり。(253)後魯祖以外は、必ずしも世代明かならず)

第廿の巻、已に畢る。

海東に新たに印版を開する祖堂集。其の本迹を現ずる者は、二百五十三員、幷びに二十巻の内に載せたり。迹を知ると莫き者は、具さに錄する能わず。

釋尊伝金襴袈裟 此の話は、すでに増一阿含四十四の第三經(南傳には相當經なし)、阿育王傳三、阿育王經七、付法藏經一、高齊那連提耶舍譯の大悲經二(迦葉品)、根本說一切有部毘奈耶雜事四十、等にも見えるもので、禪門の資料としては、神會(670—762)の菩提達摩南宗定是非論に、「昔釋迦如來の金襴の袈裟見に雞足山に在り、迦葉今現に此の袈裟を持つて、彌勒の出世を待つて此の衣を分付せんとす、釋迦如來の衣を傳えて信と爲すことを表わすなり、我が六代の祖師も亦た復た是の如し」(胡適校本 p. 846)、とあるのが始めである。但し、釋尊の傳衣と達摩の傳衣とは、必ずしも同一と見られていない。

初祖傍出 初祖達摩に道育と惠可の二弟子があつたことは、すでに同門の曇林が、略辨大乘入道四行の序に傳えるところで、道宣(596—667)の續高僧傳もこれを認め、特に法沖傳の附記で、「達摩禪師の後、惠可、惠育の二人有り、育師は道を受けて心に行じ口に末だ說かず、可禪師の後、粲禪師あり」(T. 50, 666 b)と云つて居り、道育は一名惠育であつたらしい。私が先に紹介した傳法寶紀の別本であるペリオ本3559號に、先德集於雙峯山塔各談玄理第十二に、昱上人曰く、證真亡境、寂慮無思(禪學研究第五十三號 p. 55)、とあるのも同じ人を指すのであろう。處が、達摩に惣持なる門人があつたことは、以上の文獻や、楞伽師資記に傳えず、降つて四川の智詵系統の歷代法寶記(T. 51. p. 181 a)が始めて主張するところで、而も例の有名な皮肉骨髓の話に關係する尼總持とされている。最澄(767—822)の內證佛法相承血脈譜もこれを承け、「江西馬祖系の寶林傳(801)は、更に偏頭副を加えて四人とするが、祖堂集(952)は却つて三人說を承けている。偏頭副は、傳燈錄(1004)では道副とされ、恐らくは續高僧傳の定林寺僧副の脫化であろう。處が、尼總持は時に尼僧であつたとも云うが、古い資料に全くその原型を見出し得ない。歷代法寶記は傳說的な性格の強い書で、恐らくは創作の人物であろう。

現其本迹者二百五十四員 此の數字は正確でない。本文二十巻中に、獨立の專章を有する者は、正しくは二百四十六人で、本文中の

系譜にその名の見える者に、空宗の五名、北宗の三名、草堂系の三名（此の三名は目錄に表われない）、それに前記の初祖下傍出の二人を合せて十三名があり、いわゆるその本迹を現ずる者は、すべて二百五十九人である。

なお此の目錄に於ける世代の數え方は、七佛から數えて、西天の二十八祖東土の五祖を合して四十代とし、更に六祖慧能以後、石頭系に八代、馬祖系に七代を加えて、夫々四十八代、又は四十七代と呼んでいるが、此の數え方は本文には見られぬものである。ただ、敦煌本六祖壇經にのみ此の例があるから、目錄の編者は恐らく朝鮮に於ける古い壇經の傳統に從つたのであろう。又、前記のように、牛頭系を空宗、神秀や老安を北宗と呼ぶのも、元來は宗密の禪源諸詮集などに從つたものであろうが、本來の祖堂集にあつたものかどうか。此の稱呼を本文はすべて注として夾んでいるが、此は海東に於ける開版の時に加えられたものでなかろうか。後代の傳燈錄にその名のみあつて機緣の傳えられぬ海東僧の詳傳が、今日の祖堂集の本文に相当多く收められている事實の如きも、或は本來の編者である靜筠二禪德が海東出身者であつたためかも知れぬが、寧ろ開版に際して此の目錄の新加のみならず、本文自體に或る程度の加筆が行われたことを示すものでなかろうか。

四　(分 I－7, 8)

祖堂集卷第一

第一毗婆尸佛、姓拘樓、刹利王種。父字槃裟、母字槃頭末陀。所治國名刹利末提。偈曰、

身從無相中受生、喩如幻出諸形像、

幻人心識本來空、罪福皆空無所住。

第二尸棄佛、姓拘樓、刹利王種。父字阿輪拏、母字婆羅訶越提。所治國名阿樓那和提。偈曰、

起諸善法本是幻、造諸惡業亦是幻、

身如聚沫心如風、幻出無根無實性。

第三毗舍浮佛、姓拘樓、刹利王種、父字須波羅提和、母字耶舍越提。所治國名阿耨憂摩。偈曰、

假借四大以爲身、心本無生因境有、
前境若無心亦無、罪福如幻起亦滅。
第四拘留孫佛、姓迦葉、婆羅門種。父字阿技達兜、母字隨舍迦、所治國名輪訶利提。偈曰、
見身無實是見佛、了心如幻是了佛、
了得身心本性空、斯人与佛何殊別。
第五拘那含牟尼佛、姓迦葉、婆羅門種。父字耶睒鉢多、母字欝多羅。所治國名差摩越提、偈曰、
佛不見身知是佛、若實有知別無佛、
智者能知罪性空、坦然不懼於生死。
第六迦葉佛、姓迦葉、婆羅門種。父字阿技達耶、母字檀明越提耶。所治國名波羅私、偈曰、
一切衆生性淸淨、從本無生無可滅。
卽此身心是幻生、幻化之中無罪福。
第七釋迦牟尼佛、姓釋迦、刹利王種、父字閱頭檀、母字摩訶摩耶。所治國名迦維羅衞。偈曰、
幻化無因亦無生、皆則自然見如是、
諸法無非自化生、幻化無生無所畏。

七佛の偈は、別に宗鏡錄九十七、傳燈錄一（聯燈一、會元一）、禪門諸祖師偈頌上之上、等にあり、多少の文字の異同がある。卽ち、喩を、宗鏡は由、他は猶。像を傳燈は象。空を、祖堂以外はすべて無。法を、宗鏡、傳燈は同じく法とするも、諸祖頌は業。技は原本は枝とあるも、今改む。見佛を、宗鏡と諸祖頌は佛見、傳燈は佛身。了佛を、宗鏡と諸祖頌は佛了、傳燈は佛幻。懼を、伝燈のみは怖。則を、宗鏡と諸祖頌は卽、となす相違である。なお、第六迦葉佛の父の字を、原本には阿技達耶婆とするが、最後の婆は衍字である。

諸祖頌の佛祖傳法偈は、潭州尋和尚の著語が附せられて居り、此の人は恐らく傳燈三十に收める、潭州龍會道尋の遍參三昧歌の作者と同一人であろうが、著語の内容は比較的新しい様にも思われる。或は、七佛の偈そのものを作ったのが潭州尋和尚で、著語は後の人の作かも知れぬ。

第一毗婆尸佛は、姓は拘樓、刹利王種たり。父の字は槃裟、母の字は槃頭末陀。治むる所の國を刹末提と名づく。偈に曰く、

身は無相の中より生を受く、喩えば幻の諸の形像を出すが如し。幻人の心識は本來空、罪福も皆な空にして所住無し。

第二尸棄佛は、姓は拘樓、刹利王種たり。父の字は阿輪拏、母の字は婆羅訶越提。治むる所の國を提阿樓那和と名づく。偈に曰く、

諸の善法を起すも本より是れ幻、諸の惡業を造るも亦た是れ幻なり。身は聚沫の如く、心は風の如し、幻出して根無く實の性無し。

第三毗舍浮佛は、姓は拘樓、刹利王種たり。父の字は須波羅提和、母の字は耶舍越提。治むる所の國を阿縛憂摩と名づく。偈に曰く、

假りに四大を借りて以て身と爲す、心は本より無生なれども境に因つて有なり。前境若し無ならば心も亦た無なり、罪福は幻の如く起るも亦た滅す。

第四拘樓孫佛は、姓は迦葉、婆羅門種たり。父の字は阿技達兜、母の字は隨舍迦。治むる所の國を輪訶利提と名づく。偈に曰く、

身の實無きを見れば是れ佛を見る、心の幻の如くなるを了すれば是れ佛を了す。身心の本より性空なるを了得すれば、斯の人は佛と何ぞ殊別せん。

第五拘那含牟尼佛は、姓は迦葉、婆羅門種たり。父の字は耶睒鉢多、母の字は欝多羅。治むる所の國を差摩越提と名づく。偈に曰く、

佛は身を見ず知ぞ是れ佛なり、若し實に知有らば別に佛無し。智者は能く罪性の空なるを知り、坦然として生死を懼れず。

第六迦葉佛は、姓は迦葉、婆羅門種たり。父の字は阿技達耶、母の字は檀明越提耶。治むる所の國を波羅私と名づく。偈に曰く、

一切衆生は性清淨なり、本より無生にして滅す可き無し。卽ち此の身心は是れ幻生にして、幻化の中に罪福無し。

第七釋迦牟尼佛は、姓は釋迦、刹利王種たり。父の字は閱頭檀、母の字は摩訶摩耶。治むる所の國を迦維羅衞と名づく。偈に曰く、

幻化は因無く亦た生無し、皆な則ち自然にして是の如きを見わす。諸法は自から化生せるに非ざる無し、幻化は無生にして畏るる所無し。

以下七佛の章は恐らく祖堂集の獨創である。現存の寶林傳の卷首は失われているが、もと七佛章は無かつたものと思われる。曾て、常盤博士は傳燈二十九に、僧潤の詩三首があつて、その一に、因みに寶林傳を覽る、と題し、迦葉最初傳去盛、慧能末後得來深、の句あるを指摘され、最近、水野博士もまた、契嵩の傳法正宗記卷第一の末尾に、寶林傳其端不列七佛、猶吾書之意也、とあるを指摘された。私は曾て舊稿で、敦煌本壇經にすでに七佛が加えられていることを、現存寶林傳卷首の缺失紙數から推して、卷首に七佛章があつたのではないかと論じたが、今更めて舊說を改めて置きたい。因みに祖堂集以後の各燈史の卷首の部分について、異同を表示すれば、次の如くである。

寶林傳	祖堂集	傳燈	廣燈	正宗記	續燈	聯燈	普燈	會元
釋迦	七佛	七佛	釋迦	釋迦	釋迦	七佛		七佛
西天二十七祖	〃	〃	〃	〃	〃	〃		釋迦
達磨	〃	〃	〃	〃	〃	〃	達磨	西天二十七祖
東土六祖	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	以下略							

七佛の說は、古く長阿含卷第一の大本經（パーリ相當經は Dīghanikāya 14, Mahāpadāna, S, で、南傳六に平等通昭氏の國譯あり）に見え、その別譯に七佛父母姓字經、及び趙宋代新譯の七佛經、毘婆尸佛經、があり、別に增一阿含卷第四十五〔十不善品第四十八の第四經〕や、雜阿含十五〔第三六六經〕を始め、パーリ佛種姓經や、賢劫經七、觀佛三昧海經十、灌頂經七及び八、大吉義神呪經一、華嚴經昇須彌頂品、等にも見え、更に僧祐の釋迦譜や、道世の法苑珠林等にも集錄されているが、元來、七佛傳說の起りは、リグ、ヴェーダ以來の「過去七人の仙者」の思想に本づくものとされ（中村元、『ゴータマ・ブッダ』p. 308、竹本壽光、「インド佛敎に於ける過去佛思想の形成」、佛敎文化研究8）、特に律藏の成立にも密接な關係をもつている。禪門に於ける七佛、及び七佛偈の創唱は、後述のように律藏に含まれる七佛說戒偈の脫化であろうが、今、此の問題に入るに當つて、先づ、祖堂集、傳燈錄、等の禪の燈史が掲げている七佛の名稱や、父母の姓字等に關する資料を整理しておこう。

關係資料は、便宜的に次の八種とする。

①祖堂集　1—7

②大本經（後秦、佛陀耶舍、竺佛念共譯）T. 1, 1—3 特に大正藏經が校合している三本㊀、及びパーリ㊁

③七佛父母姓字經（前魏失譯）T. 1, 159 b

④增一阿含（東晉、僧伽提婆譯）T. 2, 790 b

⑤釋迦譜（梁、僧祐撰）T. 50, 8c—9 b

⑥法苑珠林（唐、道世撰）T. 53, 334 a—b

⑦景德傳燈錄（宋、道原撰）T. 51, 205 a—b
⑧七佛經（宋、法天譯）T. 1, 150 a—b

釋迦譜と同系統のものに、道宣の釋迦氏譜があり、祖堂集の釋迦牟尼佛章の資料として重要であるが、此の書は七佛の記事を缺いており、宋以後の聯燈・會元・大光明藏、等の燈史類は、すべて傳燈錄によつているから、特に取り上げるに及ばぬ。最後の七佛經は祖堂集以後であるが、特色があるので參考となる。但し、毗婆尸佛以外の記事がない。又、赤沼智善師の「印度佛敎固有名詞辭典」によると、上記以外にも資料を加えた詳細な圖表があるが、今は七佛の資料そのものを追究することはしない。

第一毗婆尸佛 (Vipaśyin 勝觀佛)

佛名	姓	種	父	母	城
①毗婆尸	拘樓	刹利王種	槃裘	槃頭末陀	刹末提
②毗婆尸	拘利若	刹利種	槃頭	槃頭婆提	槃頭婆提
			㊂槃頭摩多	槃頭摩底	槃頭摩那
(パ)Vipassin	koṇḍañña	khattiya	Bandhumant	Bandhumati	Bandhumati
③維衛佛	拘隣	刹利種	槃裘	槃頭末陀	刹末提
④毗婆尸	瞿曇	刹利種	ナシ	ナシ	ナシ
	拘鄰若				
⑤すべて②に同じ					
⑥原則として③④による	拘樓				
⑦すべて②に同じ					
⑧毗婆尸	憍陳族	刹帝利姓	滿度摩王	滿度摩	滿度摩

第二尸棄佛 (śikhin 持髻佛)

①尸棄	拘樓	刹利王種	阿輪拏	婆羅訶越提	阿樓那和提
②尸棄	拘利若	刹利種	明相	光曜	光相
(パ)Sikhin			Aruṇa	Pabhāvatī	Aruṇavatī

③式佛	拘隣	刹利種	阿輪拏	波羅呵越提	阿樓那恕提
④式詰	瞿曇 拘鄰若	刹利種	ナシ	ナシ	ナシ
⑤すべて②に同じ					
⑥式棄佛	他は②③に同じ				
⑦母名以外は②に同じ				光耀	
⑧尸棄佛	憍陳族	刹帝利姓	阿嚕拏王	阿嚕拏	阿嚕嚩帝

第三毗舍浮佛 (Viśvabhū 徧一切自在佛)

①毗舍浮	拘樓	刹利王種	須波羅提和	耶舍越提	阿耨憂摩
②毘舍婆	拘利若	刹利種	善燈	稱戒	無喩
(パ)Vessabhū			Suppatita	Yasavatī	Anopama
③隨葉佛	拘隣	刹利種	須波羅提恕	耶舍越提	阿耨憂摩
④毘舍羅婆	瞿曇 拘隣若	刹利種	ナシ	ナシ	ナシ
⑤父名以外は②に同じ					
⑥すべて②③に同じ					
⑦毘舍浮佛	他は②に同じ		善燈		
⑧毘舍浮佛	憍陳族	刹帝利姓	餅鉢囉底都王	鉢囉婆嚩底	阿努鉢麼

第四拘留孫佛 (Krakucchanda 所應斷佛)

①拘留孫佛	迦葉	婆羅門種	阿技達兜	隨舍迦	輪訶利提
②拘留孫	迦葉	婆羅門種	祀㊀禮 得德	善枝	安和 (安和王)

(パ)KaKusandha	Kassapa	Brahmana	Aggidatta	Visākhā	Khemavatī
③拘樓秦佛	迦葉	婆羅門種	阿技違兜(達)	隨舍迦	輪訶唎提那(須訶提王)
④拘屢孫	迦婆羅堕葉	婆羅門種	ナシ	ナシ	ナシ
⑤父名以外は②に同じ					
⑥すべて②③に同じ					
⑦拘留孫佛	②	③	禮得	②	②
⑧俱留孫佛	迦葉族	婆羅門姓	野倪也那多	尾舍佉	刹摩(刹謨刹摩)

第五拘那含牟尼佛 (Kanakamuni 金色仙佛)

①拘那含牟尼	迦葉	婆羅門種	耶睒鉢多	鬱多羅	差摩越提
②拘那含	迦葉	婆羅門種	犬德	善勝	清淨(清淨王)
(パ)Konāgamana			Yaññdatta	Uttarā	Sobhavatī
③拘那含牟尼佛	迦葉	婆羅門種	耶睒鉢多	鬱多羅	差摩越提(差摩)
④拘那含牟尼	迦婆羅堕葉	婆羅門種	ナシ	ナシ	ナシ
⑤②		②	内德	②	②
⑥すべて②③に同じ					
⑦拘那含牟尼佛	②	②	②	②	②
⑧俱那含牟尼佛	迦葉族	婆羅門姓	野倪也那覩	烏多囉	輸婆縛帝(輸部)

第六迦葉佛 (Kāśyapa 飲光佛)

①迦葉	迦葉	婆羅門種	阿技達耶(婆)	檀明越提耶	波羅私
②迦葉	迦葉	婆羅門種	梵德	財主	波羅棕(汲毗王)
(パ)Kassapa			Brahmadatta	Dhanavati	Bārānasī
③迦葉佛	迦葉	婆羅門種	阿技達耶	檀那越提耶	波羅私(其甚堕)
④迦葉	迦葉(婆羅堕)	婆羅門種	ナシ	ナシ	ナシ
⑤すべて②に同じ					
⑥すべて②③に同じ					
⑦②	②迦葉族	②婆羅門姓	②酥沒囉賀摩	②沒囉賀虞鉢多	波羅奈
⑧迦葉佛					波羅奈(訖里計)

第七釋迦牟尼佛 (śākyamuni 能仁寂默佛)

①釋迦牟尼佛	釋迦	刹利王種	閲頭檀	摩迦摩耶	迦維羅衛
②(我)	瞿曇	刹利種	淨飯	大清淨妙	迦毗羅衛
(パ)Sakyamuni	Gotama		Suddhodana	㊀大化 Māya	Kapilavatthu
③釋迦文尼佛	瞿曇	刹利種	閲頭檀	摩訶摩耶	迦維羅衛(槃提)
④釋迦文	瞿曇(拘鄭若)	刹利種	ナシ	ナシ	ナシ
⑤すべて②に同じ					
⑥すべて②③に同じ					
⑦釋迦牟尼佛		刹利	淨飯天	大清淨妙	
⑧釋迦牟尼佛	瞿曇族	刹帝利姓	淨飯王	謨訶摩耶	迦毘羅

右の對照によつて、祖堂集が珠林を通して七佛父母姓字經に據り、傳燈錄が長阿含の大本經によつていることが判明するが、共に梵

(巳) 漢混用による不統一が目につく。特に祖堂集が第六迦葉佛の父の字を阿技達耶婆としている如き、七佛父母姓字經に、「父の字は阿技達耶、婆羅門種なり」とあるのを誤つて斷句したためで、全く稚拙極まる不注意と言わねばならぬ。寶林傳以來の燈史の書が、高い學術的水準を誇つた從來の佛教學から、常に卑俗の譏を受けた所以であるが、他面それだけに深く民衆社會にくい込んでいた唐五代期の禪佛教の體質を彷彿せしめるところがあろう。此は大迦葉章以後に見られる付法藏傳のとり上げ方や、師子比丘と菩提達摩の間を連結するための三人の祖師傳の創作態度にも共通するもので、從來その資料的不備や、機緣の荒唐さにも拘らず、とに角宋代以後に於ける禪宗祖統說の基礎を構成したのである。

○以下、祖堂集の七佛章に見える七佛父母の姓字や國名の語義について簡單に考證しよう。

毗婆尸 vipaśyin, vipassin の音寫で、大本經は徧眼と譯す。華嚴經疏鈔十七に、毘婆尸とは、此に翻ずるに四あり、謂わく、淨觀、勝觀、勝見、徧見なり、月の圓なるが如く、智滿ずるは是れ徧見なり、魄盡き惑亡ずるは是れ淨觀なり、既に圓にして且つ淨なるは是れ勝觀、勝見なり、(T. 35, 628 c) と云う。別に、維衛佛、又は維越佛とも音寫するが、維の音は、Vimalakīrti を維摩、Vaiśāli を維耶離、Avivartika を阿維越と譯している等の例が參照される。釋尊の誕生地である迦毗羅衛を迦維羅衛とする例もあり、衛は、舍衛 (śrāvastī)、分衛 (piṇḍapātika) の衛に同じ。又、越は後述の越提の條をみよ。

拘樓 Koṇḍañña, Kauṇḍinya の音寫の訛。譯語は珠林の引用によるもの。古く憍陳那とも音寫され、Kuṇḍin 族のものの意。漢譯では火器の意とする (玄應二十四)。史實としては五比丘の一人である阿若憍陳如 añña-Koṇḍañña に本づくものらしい (大乘佛教成立論序說 p. 339)。パーリ文佛種姓經 Buddha-vaṃsa には、燃燈佛の後に、憍陳如 Koṇḍañña 等の過去二十四佛が相次で出世したとする (南傳四十一、250)。

刹利 Khattiya, kṣatriya の音寫。四姓の一で、王族階級を指す。一般に刹帝利種、刹利王種などとも云われる。支配者の意で、田主と譯される。佛教資料では、刹利種を婆羅門の上に置いて居り、後の釋迦佛章 (第五段) に詳說がある。

槃裖 Bhandhumā の音寫。譯語は七佛父母姓字經によるもの。パーリテクスト協會の巴英辭典には、having relationes, rich in kinsmen と云うから、關係深き人、親族の意である。裖字の原音は明かにし難い。

槃頭末陀 Bhandhumatī の音寫。Bhandhumā の女姓名。

刹末提 音寫の由來は明かでないが、刹摩 Kṣamā から出た語であろう。土地、國土の意である。パーリ大本經・漢譯大本經は、ともに Bandhumati 槃頭婆提で、母后の名と同じである。親族城の意である。

尸棄　Śikhi. sikhi の音寫。頂髻、螺髻、最上、火首、火依、等の意という。別に六度集經三、賢愚經三、增一阿含三十八等に勒那識祇 ratna-sikhi という過去佛ありとし、燃燈佛が曾てこの佛より受記を得たとして居り、大論四、その他には、闍那尸棄、刺那尸棄、等と譯すが、元來は同一起源の過去佛であろう。後者は一般に、寶藏、寶髻と譯される。

阿輪拏　Aruṇa の音寫。長阿含では明相。元來は曉光、太陽、等の意で、明け方にはじめて天空が白む義である。律藏用語としても知られる。

婆羅訶越提　Pabhāvati の音寫。長阿含は光曜。威力ある人、威光ある人の意。越提は vati の古い音寫で、主の意。詳しくは後述の檀明越提の條をみよ。

阿樓那和提　Arunavati の音寫。長阿含は光相。父王の名に本づくもの。和提は越提に同じ。

毗舍浮　Vessabhū, Viśvabhū の音寫。遍一切自在・遍現・勝尊の意という。パーリ Mahāvamsa には、過去二十四佛中の第二十一佛とする（南傳六十152）。隨葉佛の稱は、由來が明かでないが、第四拘留孫佛の母の名 Visākha が、隨舍迦と音寫される例が參照されよう。

須波羅提和　Suppatita の音寫。長阿含は善燈。釋迦譜の善澄は、恐らく誤寫。

耶舍越提　Yasavati の音寫。稱戒、有名稱と譯す。Yasa は、名譽・名聲ある人の意である。

阿耨憂摩　Anopama の音寫。無喩、喩なきの意。

拘留孫　Kakusandha, Krakuchanda の音寫。領持、滅累、等と譯す。法顯傳、西域記六、等に遺蹟の記事がある。賢劫千佛の第一に位する佛として、恐らく過去佛思想の古層に屬するもの。宇井博士の「佛國記に存する音譯語の字音」（大乘佛典の研究 p. 91）にこの佛名の音譯について考證がある。

迦葉　Kassapa, Kāśyapa の音寫。古代神話以來の仙人思想に本づくもの。增一阿含は、迦葉姓の他に、婆羅墮の出であるとするが、婆羅墮は、Bhāradvāja の音寫で、頗羅墮、頗羅吒とも書かれ、婆羅門六姓の中の一姓である。重瞳、捷疾、利根、滿誥、などと譯される。

婆羅門　Brāhmana の音寫。四姓の第一に位する司祭者の階級。パーリ長部の阿摩晝經 Ambaṭṭhasutta（漢譯同名）や、Suttanipāta の大品六、等に、婆羅門と刹帝利の優劣に關する說話がある。後に釋迦佛章の第六段に引かれる。

阿技達兜　Aggidatta の音寫。禮德、禮得、等と譯される。祈りて得られたる人の意である。以下、賢劫の三佛がすべて同じ系統の名で呼ばれていることは、バラモン出身の聖者であるためであろう。竺法護譯の賢劫經七には、夫々、祠祀施、施尊、梵施、な

どといつている (T. 14, 50 b)。

隨舍迦 visākhā の音寫。長阿含では、善枝。賢劫經では維耶妙勝 (:50 c) とするが、維耶はやはり音寫である。維摩經の Vaiśālī を毘耶離、毘舍離、維耶離などと寫すのと同じ。又、毘舍佉とも音寫し、別に Viśākha-upāsikā、卽ち蜜利伽羅磨多 mrgāra-mātr、鹿子母を指すことがある。

輪訶利提 音寫の原梵語は明かでないが、恐らくは次述の須詞提と關係するものであろう。パーリ原語は Khemarati で、語義は安和、安隱なる都城、の意。王の名 Khema 安和に本づくもの。提は、前記の越提、又は和越と同じである。後述の檀明越提の下をみよ。長阿含では、王名を須詞提とするが、此の語は恐らく Sukhāvati の音寫で、樂有・安樂・安養の意であり、極樂淨土の異名である。又、賢劫經に仁賢城とするのは、恐らく意譯である。

拘那含牟尼佛 Konāgamana, kanakamuni の音寫。金色仙、金儒、金寂靜、などと譯す。牟尼は聖者の意。後述の釋迦牟尼佛の條をみよ。法顯傳、西域記六、等にこの佛の遺蹟の記事があり、音寫については、前引の宇井博士の著述に考證されている。

耶睒鉢多 Yaññadatta の音寫。長阿含では、內德。大德とも譯される。Yaññaは、犧牲祭、供犧、祭祀、などの意であり、臨濟錄、その他で知られる演若達多 Yajñadatta と同名である。印度では、子なき者が天を祭つて授けられた時、提婆達多 (天授)、演若達多 (祠授) などと名づけるのが常であつたと云う。

罰多羅 Uttarā の音寫。長阿含では、善勝。より高い、の意。

差摩越提 Sobhavati の音寫。淸淨 (城) と譯される。王の名 Sobha (淸淨) に因む名。舊い賢劫經は、上被城とし、別本では占波城とするが、恐らくは誤つて膽波國 (Campā) に結びつけたもの。

迦葉 Kassapa, Kāśyapa の音寫。語義は、前記の種族の名としての迦葉と同じく、古い仙人思想の傳統に本づくものであるが、史實的には、釋迦佛の高弟であり、付法藏第一祖の摩訶迦葉 Mahā-kāśypa から要請せられたもので (山田龍城、前揭書)、飮光佛、護光佛、などと譯されるのは、明かにその證據であろう。法顯傳、北魏僧惠生使西域記、大唐西域記六、等にともに此の佛の遺跡について記している。詳しくは、後段の摩訶迦葉祖の章で考證したい。

阿技達耶 パーリ大本經は、Brahmadatta で、梵德、又は梵施、と譯され、有名な波斯匿王 Pasenadi の父王と同名である。漢譯の語源は明かでないが、若し Agnidatta ならば、すでに第四拘留佛の父である阿技達兜と同一で、禮德と譯された人。漢譯では阿耆達とも音寫し、火を供養する故に阿耆達と名づく、とも云われる。或は又、七佛姓字經の原本に從つて、阿枝達耶と見るなら、Ajita 阿耆多の音寫で、六師外道の一人である Ajitakeśa-Kambala などに由來するかも知れぬが、宋譯七佛經の鮈沒囉

賀摩となると、いよいよ判らない。恐らく枝ではあるまい。

檀明越提耶　Dhanavatī の音寫。長阿含では財主と翻じている。雅語では陀那鉢底 dāna-pati で、一般に檀越と音寫されるが、越は、pati の最後の母音が落ちてパトの如くなり、t が輕いから越の字で寫したもの、という（宇井博士・前掲書 p. 85）。但し、最後の耶は不明。パティは主の意であるが、vati. 又は pati を越提と音寫する例は、すでに注したように第二尸棄佛の母の名の婆羅訶越提や、第五拘那含牟尼佛所住の都城名、差摩越提の他、多くの例がある。なお、賢劫經は、母の名を經業とするが、意義明かでない。

波羅私　Bārāṇasī, Vārāṇasī の音寫。長阿含は波羅柰とする。波羅奈斯、波羅痆斯とも云われ、江繞城と譯される。今日のベナレス市に相當し、鹿野苑のあつたところ。宇井博士の前掲書（p. 69）によると、Vārāṇasī は、古くから Vāṇārasī とも云われてラーとナーとが入れ代り、俗語で Vāṇārasi となつて va が ba に通じ Benares の名が出來たのだと云う。パーリ大本經は、當時の王の名を汲毗 kikin 王とする。即ち訖栗枳王 krki である。語義は、作事、瘦細、久章、などの意と云う。起世經十に、善立王の子孫、相承けて波羅奈大城を治化す。一千一百の王有りて、其の最後の王を雞梨祁と名づく。爾の時、迦葉如來、世間に出現し、菩薩は彼に於て梵行を修し、兜率天に生ず云云、とある。なお、賢劫經に、城名を神氏とするのは、恐らく意譯であろうか。

釋迦牟尼佛　Sakyamuni, Śākyamuni の音寫。釋迦族出身の聖者の意。釋迦は能、又は直の意、牟尼は寂默、又は賢者の意で、一般に能仁と譯され、釋尊と尊稱する。賢劫經が君子種とするのは意譯であろう。釋迦族は、中印度を支配した大古の王、甘蔗王 Ikṣvāku (Okkāka) の後裔と云われ、恐らくコーサラ國に從屬朝貢していた小族で、ヒマーラヤ山麓のネパール地方に住んでいたらしいと云われる（中村元・ゴータマ・ブッダ p. 23）。パーリ大本經、及び增一阿含では釋迦佛の族姓を瞿曇とするが瞿曇は Gotama の音寫で、「最もすぐれた牛」の意であると云う。又、增一阿含は、此の瞿曇という族姓を、第一毗波尸佛以下、尸棄佛、毗舍浮佛の三佛、つまり過去莊嚴劫の三佛のすべてに屬せしめて、釋尊と全く同一族姓とし、それぞれ瞿曇、拘鄰若の二姓があつたとして居るが　此は過去七佛を二つのグループに分つて、一方の佛たちが波羅提木叉を說いたために正法が久住したのに對して、一方の組がそれを說かなかつたために正法が斷えた、とする律藏の序文に見える話と關係がある樣である。然し、拘鄰と瞿曇を同姓とみるのは或は別の理由、つまり、次述のように釋尊の母后である摩訶摩耶の出自の族姓である拘利 Koliya との混同によるのかも知れない。

閱頭檀　Suddhodana の音寫。輸頭檀那、輸檀、悅頭檀、等とも書かれ、淨飯王と譯される人。前述の甘蔗王の後裔で、師子頰王

Simhahanu, Sihahanu の長子と云われる。

摩訶摩耶 Maha-Māya の音寫。長阿含は、大淸淨妙、又は大化、賢劫經では極妙、と譯す。淨飯王統治の迦毘羅衛城の東方に當る中印度の拘利國 koliya、天臂城 devadaha の主、善覺王 Subhūti の次女という。この人は悉達太子を產んだ後七日で沒したため、長女の摩耶が更めて迎えられたとされ、或はその逆とも云う。

迦維羅衛 Kapila-vatthu, Kapilavastu の音寫。長阿含は、迦毗羅衛。蒼城、黃赤城、黃頭居處、黃髮仙人住處、などと譯す。カピラ仙人の故趾で、釋迦族の根據地たりしところ。vatthu、vastu は住所の意で、婆兜と音寫されるのが一般。此の音が衛で寫されることについては、宇井博士の前掲書 (p. 66) に說があり、既に注したように毗婆尸 vipaśyin. vipassin が、維衛、又は維越と音寫される例が參考となる。なお、カピラバッツは、今日のネパール國、タラーイ地方にあつた一都市で、詳しい考證は後段の釋迦牟尼佛章の第六段にゆずる。

○ところで、七佛說を禪の祖統說にとり入れた最初は、先に述べたように敦煌本檀經であるが、ここにはなお未だ七佛の名を明記していない（宗寶本にはあるがいうまでもなく後代の改編である）。古檀經の成立年代の推定は困難な問題で、七佛說がとり入れられている點のみから云えば、恐らく七佛章をもたなかつた寶林傳より後のようであるが、敦煌本檀經に見える達摩より惠能に至る唐土の祖師たちの傳衣付法の偈は、水野博士が指摘されるように、明かに寶林傳の相當偈よりも古い形を示して居る。結局、古檀經の傳衣付法偈を發見させたものが寶林傳であり、七佛の說を發展させたものが祖堂集であると見ておく外はないが、七佛說の發展は畢竟七佛偈の創唱に他ならない。七佛偈の創作が、祖堂集の編者その人によるか、或は當時すでに叢林に行われていたものを、祖堂集が集錄したにすぎぬかは、もとより決定し得ないけれども、七佛偈の創作には、恐らく律藏が傳える七佛說戒の偈が機緣となつたのでないかと思われる。元來、過去佛に關する說話は、七佛以外にも、先述のパーリ佛種性經の二十四佛や、普曜經の四十五佛、無量壽經の五十三佛を始め、觀藥王藥上經には現在賢劫、及び未來星宿劫を含む三劫三千佛の說があり、更に別に七萬五千佛、乃至七千佛の過去佛を主張するものもあつて、その內容は極めて多彩である。從つて、禪がこれらの過去佛の中から、特に七佛のみをとり上げるのは、やはり何らかの理由があつた筈である。いつたい、七佛說戒の偈に關する傳說が、律藏そのものの成立と密接な關係にあることは、すでに平川博士が「律藏の研究」(p. 368) で主張されるところで、今、此の問題そのものをとり上げないが、現存の漢譯律藏は各部派を通じて此の說を保存して居り、劉宋佛陀什譯・彌沙塞五分戒本 (T. 22, 199 c)、梁明徵集・五分比丘尼戒本 (：213 b)、東晉佛陀跋陀羅譯・摩訶僧祇律大比丘戒本 (：555 b)、同じく東晉法顯共覺賢譯・摩訶僧祇比丘尼戒本(：564 c)、後秦佛陀耶舍譯・四分比丘戒本 (：1022 b)、四分比丘尼戒本 (：1040 b)、羅什譯・十誦比丘波羅提木叉戒本 (T23, 478 b)、法顯集出の十誦比丘尼

波羅提木叉戒本（：488 a)、義淨譯の根本說一切有部毗奈耶卷第五十（：904 b)、同じく飲光部の解脫解經（T. 24, 659 b)、根本薩婆多部律攝卷第十四（T. 24, 608 c)、善見律毘婆沙卷五舍利弗品（T. 24, 707 c)、等に齊しく傳えられているが、中國では梵網系の菩薩戒でも此の敎戒偈を依用したものがあったらしく、例えば敦煌資料 S. 102 號は、梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒本に續いて、七佛敎戒偈文と題して收め、更に八菩薩讚戒偈文として、文珠、觀音、勢至、無盡意、寶檀花、藥王、藥上、彌勒、の八菩薩の戒偈を出している（此の菩薩戒本については、西域文化研究第六「歷史と美術の諸問題」に收める土橋秀高氏の研究がある)。祖堂集の七佛偈は、恐らく種々の點で、最も新しい義淨譯に親近關係があったのではないかと思われるので、今その文を引くと、

七佛略敎法

毘鉢尸佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、多く苦身を樂つて以て正行と爲す。又た邪師のところに詣るに、其の情欲に順つて爲めに邪法を說き、但だ苦行に由つて能く樂果を招くとなし、信解を生ぜしめて是の如きの說を作す。往昔の惡業は苦身に由つて除き、今日の新罪は更に復た作さざれば、宿業既に盡きて苦果生ぜず、果生ぜざるが故に生死の堰を破し、永く有の流を出でて常樂を獲得す、是の如き行を作すを方に沙門と曰うと。爾の時、彼の佛は此の邪解を對治せんと欲するが爲めの故に、斯の略敎を說けり、

忍は是れ勤中の上なり、能く涅槃の處を得ん、出家して他人を惱ますを、名づけて沙門とは爲さず。（次下に解釋の段あるも省略)

尸棄佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、多く生天の爲めに梵行を修し、後世に天の妙樂を受けんことを希望す。爾の時、彼の佛は諸の弟子衆を對治せんと欲するが爲めの故に、斯の略敎を說けり、

明眼のひとは險途を避け、能く安隱の處に至る、智者は生界にあるも、能く諸惡を遠離す。

毘舍浮佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、多く持戒もて心に喜足を生じ、勝行を修めず、又た常に樂つて他人の過失を說き、以て語り以て意に人を惱害す。彼を遮せんが爲めの故に、斯の略敎を說けり、

毀らず亦た害わず、善く戒經を護り、飲食には止足を知り、受用には臥具を下し、勤めて增上の定を修する、此は是れ諸佛の敎なり、

拘留孫駄佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、多く利養を希い、善品を修するを慢ず。彼を遮せんと欲するが爲めに、斯の略敎を說けり、

譬えば蜂の花を採るに、色と香を壞せずして、但だ其の味を取り去るが如し、苾芻の聚に入るも然なり。

羯諾迦牟尼佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、多く己が勝れたるを談じて他を毀呰し、唯だ多聞を習つて義理を講論し、好んで相い違逆して上人の行に乖く。彼を對治せんが爲めに、斯の略敎を說けり、

他に違逆せず、作と不作とを觀ぜず、但だ自から身行を觀ぜよ、若しくは正、若しくは不正なるを。

迦攝破佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、多く習定を樂つて心に味著を生じ、更に進んで修せず。彼を對治せんが爲めに、斯の略敎を說けり、

定心に著する勿く、勤めて靜處に修定せよ、

能く救う者は憂い無し、常に念をして失せざらしめよ、

若し人能く惠施せば、福增して怨み自から息まん、

善を修め衆惡を除かば、惑盡きて涅槃に至らん。

釋迦牟尼佛、世に出現せしとき、諸の聲聞衆は、性として煩惱多く諸の惡業を造す、多く放逸を行じて善品を修せず、少善を作す時は便ち喜足を生ぜり。三事の爲めの故に其の三頌を說き、惡行を遮せんが爲めに善方便を示し、忘念せずして善品日に增さしめ、十二年中に於て無疱の僧伽と爲る、斯の波羅底木叉の略敎を說きたまえり、

一切の惡を作すこと莫く、一切の善を應に修すべし、

遍ねく自心を調するは、是れ則ち諸佛の敎なり。

身を護るは善なる哉、能く語を護るも亦た善なり、

意を護るは善なる哉、盡く護るを最も善と爲す。

苾芻は一切を護り、能く衆苦を解脫す、善く口言を護り、亦た善く意を護るべし。

身に諸惡を作さず、常に三種の業を淨む、

是れ則ち能く大仙が、行ずる所の道に隨順せるなり。

右のうち、釋迦佛の第一偈は、他の部派の戒本ではすべて第六迦葉佛の偈（善見律では毗鉢尸佛）とされているが、此の偈は別にまた、パーリ法句經第百八十三章（漢譯では卷下、述佛品 T. 4, 567 b）を始め、增一阿含の一（T. 2, 551 a）、出曜經二十五（T. 4, 741 b）、央掘魔羅經二（T. 2, 527 a）、大般涅槃經十五（T. 12, 451 c、南本は十四 693 c）、智度論十八（T. 25, 192 b）、阿毗達磨發智論一（T. 26, 920 b）、瑜伽師地論十九（T. 30, 385 a）、根本說一切有部毗奈耶一（T. 23, 628 a）等に散見し、別に天台智顗の法華玄義二之上には、七佛通戒偈（T. 33, 695 c）と呼ばれ、小止觀の卷首（T. 46, 462 b）や、神會壇語の始め（少室逸書

本p. 58) 等にも取り上げられていること、周知の如くである。更に、第一鉢毗尸佛の偈は、パーリ大本經（南傳六 421)、宋譯毗婆尸佛經の下（：158 a)、パーリ法句經第八十四章（漢譯同上)、出曜經二十三（：731 a) に、第三毗舍浮佛の偈は、パーリ法句經第百八十五章（漢譯同上) に、第四拘留孫佛の偈は、同經第四十九章（漢譯は卷上、華香品：563 b)、出曜經十九（：709 b)、毗尼母經六（T. 24, 836 b)、佛所行讚五大般涅槃品二十六（T. 4, 48 b)、佛垂般涅槃略說教戒經（T. 12, 1111 a) に、又、第五羯諾迦牟尼佛の偈は、他の戒本では第四拘留孫佛の第二偈とされるもので、パーリ法句經第五十章（漢譯同上)、毗尼母經六（同上)、大般涅槃經十（：426 b-c, 668 a)、等にも齊しく見えて居り、特に禪門では此の一偈のみが注目されのか、敦煌本壇經（：342 a) や、歷代法寶記（T. 51, 192 b)、龍大図書館所藏の敦煌資料「菩提達摩觀門法大乘法論」(校刊少室逸書解說附錄 p. 115)、及びスタイン本2669號、北京本「證心論」(校刊、少室逸書 p. 54) 等の末尾、關口博士發見の「達摩禪師論」の冒頭などにも同一趣旨の句があり、すでに古く中國の禪觀思想の發展に深い關係を有した六朝時代の僞經である最妙勝定經（關口慈光・燉煌出土「最妙勝定經」考△石井教授還曆記念佛教論攷▽ p. 156) には、五無間業を含む五種の性罪を說いて、他人の過を說いて恭敬を生ぜず常に驕慢を起す、という一條を擧げるが、此もまた恐らくは第五羯諾迦佛の說戒偈に本づくものであろう。尤も、最妙勝定經は、右の五種の性罪も、但だ禪定を修せば自然に滅除し、禪定力を除いては他に滅しようが無いとして居り、此處に既に持戒を超える禪定解脫の立場が表面化されているのであるが、恐らくは七佛說戒偈より禪の七佛偈を創造した作者もまた、直接に最妙勝定經を知っていたかどうかは別として、明かに同じ意圖をもっていたことが看取される。元來、七佛說戒偈なるものは、宋譯の七佛經が、「賢劫中に、俱留孫佛、俱那含牟尼佛、迦葉佛もまた淸淨律儀及び禪定解脫の法を說けり、我が所說もまた是の如し」(：150 a) と言っているように、禪定解脫の法に發展する可能性を內包している。その始め、律院に同居していたと云われる中國禪宗の祖師たちが、此等の七佛說戒偈に禪定解脫の法を讀みとったことは、極めて自然な成り行きであった。中唐以後に於ける禪敎團の獨立と、そのユニークな思想的完成は、此等の偈が有していた禪戒一體の意義をより一層發展させて、戒は禪に歸するという立場から、新たな禪の七佛偈を要求するに至ったのであろう。藥山惟儼（745-828) や、臨濟義玄（-866)、雲門文偃（864-949) 等の最盛期のすぐれた禪師たちが、すべて齊しく始め四分の旨を窮めた後、忽ち禪に歸している史實が、何よりも此の推定を證據立てるであろうし、臨濟が後年に示衆して「道流、取次に諸方の老師に面門を印破せられて、『我れ禪を解し道を解す』と道うこと莫れ、辯、懸河に似たるも皆な是れ造地獄の業のみ、若し是れ眞正の學道人ならば、世間の過を求めず、切急に眞正の見解を求めんことを要す、若し眞正の見解に達して圓明ならば、方に始めて了畢せん」(T. 47, 498 b) と云うのなども、前記の第五拘那含牟尼佛の戒偈と關係するものであろうと思う。

○なお、七佛偈は、一般に祖師たちの付法の偈と合わせて、佛祖傳法偈と呼ばれるが、此の稱呼は、恐らく南宋の嘉定九年（1216) に

成立した大光明藏あたりが最初のようである。別に、禪門諸祖師偈頌上之上に佛祖傳法偈があることは、先に述べた如くであるが、此の書は數回に亘つて增補が行われた形跡があつて、確かな年代を定め難い。遡つて達摩から慧能に至る東土六祖の偈を始めて掲げた古壇經は、之を傳衣付法の偈と言つて居り、七佛の偈を始めて掲げた祖堂集は佛祖ともに單に偈と稱して區別せず、傳燈以後の燈史の書はすべて之に準じて居る。處が、宗鏡錄九十七には七佛を偈、第一祖迦葉以後を傳法偈と呼んで居て、此處に始めて傳法偈の稱が表われ、次で北宋の崇寧二年 (1103) に完成した佛國惟白の大藏綱目指要抄卷八に來つて、祖偈の翻譯者が始めて表面化し、禹門の大守楊衒之の名系記なるものが登場し、此の名系記は次で大觀二年 (1108) に出來た祖庭事苑卷八にも引かれるが、特に後者では「魏のとき西域三藏吉迦夜と昭玄寺の沙門曇曜が譯する所の付法藏傳に佛祖傳法偈を缺いていた」のを、居士萬天懿が天竺三藏那連耶舍から授けられた中華譯の祖偈によつて補い、此が智炬の寶林傳の材料となつたと云い、佛祖傳法偈の稱が用いられている。然し、もともと付法藏傳に佛祖傳法偈がある理由はなく、特に佛祖と云う場合の佛は、釋迦佛のみならず、過去六佛をも含む筈であるから、付法藏傳に過去七佛の語が無かつたと言うのは、全く語るに墮ちたものであり、更にまた、佛祖通載第九に右の傳說を掲げて「他宗に其の原を知らずして七佛偈に譯無しと謂う、寡聞淺識一に妄謬に至る、良に笑う可きなり」(T. 49, 551 b) と云うのは、いよいよ出でていよいよ笑う可きに至つたものである。

○佛祖傳法偈の成立の由來が、凡そ右の如きものであるとなると、これらの偈が主張しようとする思想もまた、決して一貫したものではない。すでに水野博士が指摘しているように、初祖達摩の傳法偈と、惠能に至る六代の祖師のそれとの間には、確かに內容的なくい違いがあり、後代のテキストになると、それが一層著しい (前掲の宗學研究 p. 32-3)。少くとも、七言四句の七佛偈は、釋迦佛及び第一祖大迦葉以後のそれと、形式も異つて居れば內容も多少違つている。西天二十七祖の偈が心、法、本、無、非、真、理等から、次第に、種、花、葉、實、心地、等の語に移つているにしても、とに角それらを一貫する傾向と、七佛偈の、幻、化、業、善惡身、罪福、無生、などの語が示す思想傾向とは異質的である。言わば、七佛偈には如幻三昧や罪福性空の主張が强く、思想史的には圓覺經や首楞嚴經を承けるもので、古壇經や寶林傳が、何れかと言えば「空」思想の傳統に立つているのよりも進んだものである。周知のように、六祖惠能の法嗣とされる永嘉眞覺大師 (665-713) に、「君見ずや、絕學無爲の閑道人、妄想を除かず眞を求めず、無明の實性は卽ち佛性、幻化空身は卽ち法身」の句で始まる、有名な證道歌の作がある。從來、「第一迦葉首めて燈を傳え、二十八代西天に記す」の句が疑われて、惠能直弟の作ではなかろうとされるものであるが、終りに近く「了了として見るに、一物無し、亦た人も無く、亦た佛も無し、大千沙界は海中の漚、一切の賢聖は電拂の如し」とある句なども、明かに、圓覺經や宗密 (780-840) の主張と密接な關係をもつもので、證道歌全體の思想傾向は、決して惠能や神會の時代のものではない。而も、我々の當面の問題であ

る七佛偈の思想が、證道歌と同一傾向のものであることはより一層注目すべきで、曾て胡適博士や、リーベンダール博士が、敦煌本の證道歌（P. 2104, S. 4307）に見える招覺大師一宿覺の名に注意して、招慶の眞覺大師文僧を引き合いに出されたのも、あながち牽強附會の說とすべきではあるまい。眞覺大師文僧を直ちに證道歌の作者とすることは勿論出來ぬにしても、此の人が七佛偈を始めて收錄した祖堂集の序者であり、而も千佛新著諸祖師頌（S. 1634）の作者として偈頌の名手であり、七佛偈が圓覺經や宗密以後の思想傾向をもつ證道歌と內容的につながつていることなどは、確かに一つの視點となるのでなかろうか。なお又、過去七佛については、百丈廣錄（宇井・第二禪宗史研究 p. 409）などにも見えるように、文殊菩薩を以て七佛の師とする考えが唐代の禪宗にはあつたようで、此の說もまた戒から禪への移りゆきを考えるのに重要な手がかりとなるものであるが、今はもう此れ以上に立ち入らないことにしたい。

第一ビバシ佛（遍ねき照見の力に目ざめたる人）は、族姓はコンダンニャ（火器）氏、王族階級の出身である。父はバンズマー親族王、母后はバンズマティー夫人で、父王が統治した國も、バンズマティー城と呼ばれていた。偈に云く、

われわれの肉身は、もともと無相の相であつて、
恰かも夢の中にさまざまの形像が現われ出ているに等しい。
幻のような人間の現世の生命や精神現象は、本來は空なるものであるから、
罪業も幸福も、すべて決定的なものではない。

第二シキ佛（肉髻をもつ覺者）は、族姓はコンダンニャ氏、王族の出身である。父王の名はマルンナ（明相王）、母后の名はパバーバティー（光曜夫人）で、父王が統治した國は、アルナティ（光相城）と呼ばれていた。偈に云く、

さまざまの善き心を起しても、もとより夢の中のことであり、
もろもろの惡業についても同樣である。
われわれの身體はうたかたの如く、生命もまた風の如くで、
何の實體もなければ、個定性もない一時の姿が幻出されているにすぎぬ。

第三ビシャフ佛（遍ねく自在なる覺者）は、族姓はコンダンニャ氏、王族の出身である。父王の名はスッパテイタ（善燈王）、母后の名はシシャバテイ（稱戒婦人）で、父王が統治した國は、アノパマ（無喩城）と呼ばれていた。偈に云く、

地水火風の四つの要素を假りて、一時、われわれの身體が形づくられる、
生命と言つてももとより無生で、對象となる物とかかわり合うかぎりの存在である。
對象が無くなると、生命もまた消え去る、
罪業も幸福も、夢の中の起滅にすぎぬ。

第四クルソン佛（すべてを斷ち切れる覺者）は、族姓はカッサパ氏、バラモン階級の出身である。父の名はアギダッタ（禮德）、母の名はビシャーカ（善枝夫人）である。所屬の國はケマバティ（安和城）、又はスカバティー（安養城）と呼ばれていた。偈に云く、

われわれの肉身が決定的なものでないと知る人は、佛を見た人であり、
われわれの精神が幻にすぎぬと知る人は、佛を知れる人である。
肉身も精神現象も、もともと空しいものだと悟れる人こそ、
まさしく佛と別なき人である。

第五コナーガマナ佛（金色の聖者）は、族姓はカッサパ氏、バラモン階級の出である。父の名はヤンニャダッタ（內德）母の名はウッタラ（善勝夫人）である。所屬の國は、ソババテイ（淸淨城）と呼ばれていた。偈に云く、

目覺めたる者は肉身を見ず、自覺こそ佛である、
眞に自覺がなされるなら、その人の他に佛はない。

智者は罪業の本來空なるを知つて、
心やすらかに生死を怖れぬ人である。
第六カッサパ佛（飲光聖者）は、族姓はカッサパ氏、バラモンの出である。父の名はアギダッタ（禮德）、母の名はダンナバティ（財主夫人）で、所屬の國は、バーラーナシー（江繞城）と呼ばれていた。偈に云く、
生きとし生けるものには、すべてもともと清淨な生命がある、
此の生命は曾て始めもなければ終りもない。
われわれの現實の肉身や精神は、そのすべてが夢の中に生きている存在で、
夢の中の存在には、本當の罪業も幸福もあり得ない。
第七釋迦牟尼佛（シャカ族出身の聖者）は、族姓はシャカ氏、王族階級の出である。父はシュドダナ（淨飯王）、母后の名はマハーマーヤ夫人（大清淨妙）で、父王統治の國は、カピラバッツ（蒼城）と呼ばれた。偈に云く、
夢に化生したものには、決定的な原因も眞の生命もない、
もともと、それらはすべて自然で、一時そのような姿をとつているにすぎぬ。
一切の存在が、みな自然の變化でないものはないのだから、
夢の中の變化のように、眞に在ることもなければ、畏れるべきものでもない。

五　(1—9, 9)

是釋迦佛者、卽賢劫中第四佛也。三劫之中、初千佛者、花光佛爲首、下至毗舍浮佛、於過去莊嚴劫中、而得成佛也。中

千佛者、拘孫樓佛爲首、下至樓至如來、於現在賢劫中、次第成佛也。後千佛者、日光如來爲首、下至須彌相佛、於未來星宿劫中、當得成佛也。

賢劫初時、香水瀰滿、中有千莖大蓮華。王其第四禪觀見此瑞、遞相謂曰、今此世界若成、當有一千賢人出現於世。是故此時名爲賢劫。

准因果經云。釋迦如來未成佛時、爲大菩薩、名曰善慧、亦名忍辱。功行已滿、位登補處、生兜率天、名日聖善、亦曰護明。爲諸天王說補處行、亦於十方現身說法。期運將至、當下作佛、覲諸國土、何者處中、則知迦毗羅國最是地之中矣。故本起經云、佛之威神、至尊至重、不生邊地之傾斜也。此迦毗羅城、三千日月、乾坤之中央也。往古諸佛、皆興於此。

俱舍論云、剡浮洲之中矣。山海經云、身毒之國、軒轅氏居之。郭璞註曰、則中天竺也。彼土自分五天竺國。中天竺國是天地之中。名既非邊、中義現矣。

因果經云、中天大夏、種姓有四、謂刹利帝種、婆羅門種、毗舍羅種、首陀羅種。刹利王種最爲高貴、劫初以來相承不絕。餘之三姓非此所論、但明佛姓、自分五別。

又長阿含經云、劫初成時、未有日月。光明諸天福盡下生、皆化爲人歡喜爲食、身光遠照飛行自在、無有男女尊卑親屬。自然地味、味如蘇蜜。有試嘗者、遂生摶食。光威通亡、呼嗟在地。食多貌悴、食小形澤、便興勝負。地味則沒、又生地皮、因食地皮故、諸惡湊集。又生林藤粳米等、衆味甘美、因茲食者、具男女根。如是展轉、便爲姻媾、遂始胎生。

樓炭經云、自然粳米、朝刈暮熟。

中阿含經云、米長四寸、人競預取。如是相殺、預取之處、後更不生。

長阿含經云、爾時衆生、既見不重生故、各懷憂惱、互封田宅、以爲堰畔。其有自藏以來、盜他田穀、由是諍起、無能決者。議立一人、號平等主、賞善罰惡、仍共供給。時有一人、容質瓌偉、威嚴鞠物、衆所信伏、則往請之。彼既受已、遂

有民主名焉。

樓炭經云、衆人言議、爲作長號、謚之曰王。以法取租、故名剎利。此譯田地主也。

時閻浮提、天下富樂安隱、地生青草、如孔雀毛。八萬群國、聚落相聞、無有寒熱及病惱者。王以正法治世。奉行十善、互相崇敬、猶如父子、人壽極久、不可量計。後有餘王、不行正法、其壽遂減、至十千歲。如是漸減、至今百年。先於劫初創始爲王、展轉相承、至菩薩身羅睺羅、正嫡便絕。餘族枝派、今猶嗣位、故下廣列轉輪粟散紹續之相也。

初をプリント本で刼としているのは誤り、原本は、蝕缺のため不明。者は、原本になし、中千佛以下の文章に例して補う。樓は、前の七佛の章では、留であるが、今は引用資料に從つたもの。日は、原本蝕缺、佛名經（T. 14, 364 c）その他によつて補う。郭は、原本に廓、改訂する。皆は、原本蝕缺なるも片に近似す、今、釋迦氏譜（T. 50, 85 c）の引用によつて皆とする。嘗は、原本に當とするが、今、釋迦氏譜による。摶は、原本に搏とするが、摶の誤り。又、藤は、原本に蘆、粳は、粳。媾は、媾。競は、竟。殺は、煞。互は、牙。何れも異體による相違で、意味は變らない。租は、原本に祖となすも、意義通ぜず、釋迦氏譜（T. 50, 85 c）の引用によつて改める。

是の釋迦佛は、卽ち賢劫中の第四佛なり。三劫の中、初めの千佛は、花光佛を首と爲し、下つて毗舍浮佛に至るまで過去莊嚴劫中に於て成佛することを得たり。中の千佛は、拘樓孫佛を首と爲し、下つて樓至如來に至るまで、現在賢劫中に於て、次第に成佛するなり。後の千佛は、日光如來を首と爲し、下つて須彌相佛に至るまで、未來星宿劫中に於て、當に成佛することを得べし。

賢劫の初めの時、香水瀰滿し、中に千莖の大蓮華有り。王、其の第四禪に此の瑞を觀見し、遂いに相い謂いて曰く、「今に此の世界、若し成らば、當に一千の賢人有つて世に出現すべし」と。是の故に、此の時を名づけて賢劫と爲すなり。

『因果經』に准ずるに、云く、「釋迦如來、未だ成佛せざりし時、大菩薩たり、名づけて善慧と曰い、亦た忍辱と名

づく。功行已に滿ちて、位、補處に登り、兜率天に生れ、名づけて聖善と曰い、亦た護明と曰う。諸の天王の爲めに補處の行を說き、亦た十方に身を現じて法を說く。期運將に至り、當下に作佛せんとして、諸の國土の何者か中に處ると覯うに、則ち、迦毗羅國の最も是れ地の中なるを知る」と。

故に、『本起經』に云く、「佛の威神は至尊至重にして、邊地の傾斜に生れたまわず」と。此の迦毗羅城は、三千の日月、乾坤の中央なり。往古の諸佛も皆な此に興れり。『俱舍論』には、「剡浮洲の中なり」と云い、『山海經』には「身毒の國は、軒轅氏ここに居す」と云い、郭璞は註して、「則ち中天竺なり」と云えり、彼の土は自から五天竺國に分るるも、中天竺國は是れ天地の中なり。その名既に邊に非ず、中の義現ぜり。

『因果經』に云く、「中天大夏に、種姓四有り。謂く、刹利帝種、婆羅門種、毗舍羅種、首陀羅種なり」と。刹利王種は最も高貴と爲す、劫初以來、相承して絕せず、餘の三姓は、此に論ずる所に非ず。但だ佛姓を明さば、自から五別を分つ。

又た『長阿含經』に云く、「劫初めて成りし時、未だ日月有らず、光明諸天は福盡きて下生し、皆な化して人と爲り歡喜を食と爲す、身光遠く照し、飛行自在にして、男女、尊卑、親屬有ること無し。自然の地味は、味わい蘇蜜の如く、試みに嘗むる者有りて、遂に摶食を生ず。光威通に亡び、呼嗟して地に在り。食多きものは貌え、食小きものは形に澤ありて、便ち勝負を興す。地味則ち沒して、又た地皮を生ずるに、地皮を食うに因るが故に、諸惡湊集す。又た、林藤・粳米等の衆味甘美なるを生じ、茲に因つて食する者は、男女の根を具す。是の如くに展轉して、便ち姻媾を爲し、遂に始めて胎生す」と。

『樓炭經』には、「自然の粳米は、朝に刈れば暮に熟す」と云い、『中阿含經』には、「米長ずること四寸」と云う。人競つて預め取り、是の如く相殺して、預め之を取る處には後更に生ぜざりき。

『長阿含經』に云く、「爾の時に衆生、既に重ねて生ぜざるを見るが故に、各々憂惱を懷き、互いに田宅を封じて以て壇畔を爲る。其の自から藏してより以來、他の田穀を盜むもの有り、是に由つて諍い起つて能く決する者無し。議りて一人を立てて、平等主と號し、善を賞し惡を罰せしめて、仍つて共に供給す。時に一人有り、容質瓌偉にして威嚴物を鞠し、衆に信伏せらる、則ち往いて之に請うに、彼既に受け已つて、遂に民主の名有り」と。

『樓炭經』には、「衆人言議して、爲に長の號を作し、之に謚して王と曰い、法を以て租を取る、故に刹利と名づく」と云えり。此に田地主と譯さんか。

時に閻浮提は、天下富樂安隱にして、地には青草を生じて孔雀の毛の如く、八萬の郡國は、聚落相聞し、寒熱及び病惱の者有ること無し。王は正法を以て世を治め、十善を奉行して、互いに相い崇敬すること猶お父子の如し。人の壽極めて久しく、量計すべからざりき。

後に餘の王有りて、正法を行わず、其の壽遂に減じて、十千歲に至り、是の如く漸く減じて、今に至つて百年となる。

先に劫初に、創始して王と爲りてより、展轉相い承けて菩薩の身と、羅睺羅に至つて、正嫡は便ち絕えたるも、餘族の枝派は、今猶お位を嗣ぐ。故に下に廣く轉輪が粟散紹續の相を列ねん。

是釋迦佛者　以下、更めて第七釋迦牟尼佛の詳傳を述べるに當つて、先づ賢劫の意義、釋迦佛の本起、迦毗羅衛國の位置、刹利種の起り、等を說く一段である。

賢劫中第四佛也　賢劫の語義は次の大悲經の引用で明かにされるように、無數の賢人の出現する世界で、言わば現實の歷史的世界の意である。大乘佛敎の歷史觀では、われわれの歷史的世界の前史としての神話時代を莊嚴劫と呼び、歷史が終末して自然に歸すべき未來を星宿劫と名づけて、過現未の三世を、無限大にまで擴張し、無限大の三劫に、夫々一千の佛を配して、三劫三千佛の說を立てた。從つて、前述の七佛のうち、前三佛は過去莊嚴劫の第九百九十八佛より一千佛に當り、後の四佛が現在賢劫の第一より第

四佛に當るとするのであるが、此は次第に發展した異る過去の諸佛の說を體系化しようとしたためと思われる。なお、本書の三劫說や、釋迦佛章の前半は、先行の釋迦譜や釋迦氏譜を承け、後の佛祖統紀の三世出興志第十四や、釋迦佛本紀第一、等の說き方にも類するところがあり、參照すべきであろう。

三劫之中　以下、三劫三千佛の說は、主として僧祐の釋迦譜（T. 50, 9c）や、法苑珠林八の千佛篇の引用（T. 53, 333b）を承け、觀藥王藥上二菩薩經（劉宋、畺良耶舍譯）に據ったもの。此經はもと、過去無量無邊阿僧祇劫のとき、瑠璃光照如來の滅度の後、像法の中に日藏比丘があつて廣く如來の無上淸淨平等大惠を說き、衆中の星宿光及び雷光明の二人の長者が雪山の良藥と醍醐を以て日藏及び大衆に施し、無上菩提心を發して成佛を願じ、藥王藥上菩薩と名づけられ、後に未來世に成佛して、淨眼、淨藏如來となるに至る本行を說いたもので、過去七佛の前に五十三佛の出世を主張する。五十三佛の說は、元來は七佛說と系統を異にしていたと思われるが、此の經は、この二說を調和しようとしたものである。今必要の部分を引くと、「時に藥上菩薩は、是の過去五十三佛の名を說き已り、默默として住しぬ、爾の時に行者、即ち定中に過去七佛世尊毘婆尸佛の讚歎して言いたまうを見ることを得たり、善哉善哉、善男子、汝が宣說する所の五十三佛は、乃ち是れ過去久遠に舊くより娑婆世界に住し、衆生を成熟して般涅槃せり、若し善男子善女人、及び世の一切衆生有つて、是の五十三佛の名を聞くことを得る者は、是の人は百千萬億阿僧祇劫に於て惡道に墮せず、若し復た人有つて、能く是の五十三佛の名を稱せん者は、生々の處に常に十方の諸佛に値遇することを得ん……と。尸棄如來・毘舍浮如來、拘留孫如來、拘那含牟尼如來、迦葉如來も亦た是の五十三佛の名を讚じ、亦た善男子善女人の能く是の五十三佛の名を聞く者、能くその名を稱する者、能く敬禮する者は、罪障を除滅すること上に說く所の如くなることを讚歎したまう、爾の時に釋迦牟尼佛、大衆に告げて言わく、我れ曾て往昔無數劫の時、妙光佛の末法の中に於て出家學道せしとき、是の五十三佛の名を聞き、聞き已りて合掌し心に歡喜を生じ、復た他の人をして聞持することを得しめ、他の人聞き已つて展轉相い敎え、乃至三千人、異口同音に一心に敬禮して、卽ち無數億劫の生死の罪を超越することを得たり、初め千佛は、華光佛を首と爲し、下つて毘舍浮佛に至るまで、莊嚴劫に佛と成ることを得たり、過去の千佛是れなり、此の中の千佛は、拘留孫佛を首と爲し、下つて樓至如來に至るまで、賢劫中に次第に成佛す、後の千佛は、日光如來を首と爲し、至つて須彌相佛に至るまで、星宿劫中に當に成佛することを得べし……とある（T. 20, 664a）。三劫三千佛の說は、これらの佛名を聞持し、稱え敬禮する功德によつて、無數億劫の生死の罪を超越することができるとされて、大乘佛敎の成立とともに、西域より六朝代の中國で流行し、おびただしい內容の異る佛名經を生み出した。多くは所謂僞經の類で、後には多少俗化し、僞妄亂眞の傾向を免れぬが、廣く深い庶民層の信仰となつて、中國淨土敎の成立に大きい影響を與えたことは見逃し得ない。現存のものは大正藏十四にまとめられて居り、龍

谷大學の西域文化研究第一に、禿氏祐祥博士の「敦煌遺文と佛名經」と題する論文があつて、それらの成立について詳述されている。

花光佛は、法華經譬喩品では、舍利弗が未來世に成佛する時の名とされて居り、梵名 Padmaprabha は、紅蓮の輝きをもつ者の意。

樓至如來は、Rucika の音寫で、愛樂佛、又は啼哭佛と譯される。日光如來は、Sūrya-prabha の譯で、一般には日光菩薩として月光とともに藥師如來の挾持とされる佛。過去雷光如來の時、日照・月照の二子とともに病苦の衆生を救うために願を起して梵行を修した醫王の長子で、醫王は卽ち東方藥師如來、長子日照が日光菩薩であると云う。須彌相佛は、維摩經不思議品では、佛名ではなくして佛土の名となつて居り、東方三十六恒沙の國を過ぎて世界あり、須彌相と名づく、其の佛の身長は八萬四千由旬、其の獅子座の高さも八萬四千由旬にして、嚴飾第一なり、とある。

賢劫初時　以下、同じく珠林八、千佛篇（：335 c）、及び釋迦氏譜（T. 50, 84 c）等の引用を承けた大悲經の所說によるもの。此の經は、高齊の那連提耶舍の譯出で、佛陀が入涅槃に際して、滅後に於ける敎法の隆替を說いて敎誡し、特に正法を大迦葉に付囑し更に將來四百年を過ぐるまでの正法傳持の有力者として、毘提耆、提知迦、優波毱多、阿輸婆毱多、鬱多羅、設陀沙荼、毘頭羅、刪闍耶、大精進、末田提、迦葉、闍知迦長者、法增優婆劫、祁婆迦大施主等の、主として北天竺に出現すべき十四人、及び阿輸迦王の信佛の事蹟を豫言し、五百年を過ぎて破戒非法の比丘の出現による佛法の衰滅を警めたもの。引用の文は、未來世に於ける稱名と舍利供養の功德を說く禮拜品第八に見える一段で、

阿難よ、何が故に名づけて賢劫と爲すや、阿難よ、此の三千大千世界は、劫成らんと欲する時、盡く一水たりき、時に淨居天は天眼を以て觀見するに、此の世界は唯だ一大水にして、見るに千枚の諸妙蓮華有りて、一一の蓮華に各千葉有り、金色金光にして大明普ねく照し、香氣芬薰として甚だ愛樂すべし、彼の淨居天は因みに此を見已つて、心に歡喜を生じ、踊躍無量にして讚歎して言く、奇なる哉奇なる哉、稀有なるかな稀有なるかな、此の如きんば劫中に當に千佛有つて世に出興すべしと、是の因緣を以て、遂に此の劫に名づけ、之を號して賢と爲すなり、阿難よ、我が滅度の後、此の賢劫の中に、當に九百九十六佛有つて世に出興すべし、拘留孫如來を首めと爲して、我は第四と爲り、次第に彌勒は當に我が處を補し、乃至、最後の盧遮如來まで、是の如く、次第せん、汝應に當に知るべし（T. 12, 958 a）、

とある。なお、那連提耶舍は、祖堂集卷二、達摩の章では、居士萬天懿に、中國に於ける達摩禪の將來を豫言する讖偈十首を與えたとされる那連耶舍で、達摩の同學佛大先が曾て佛陀跋陀羅三藏に學んだ時の同門とされる人である。勿論、荒唐の說たるを免れ

ないが、祖堂集の構成に重要な意義を持つ人物の一人である。

准因果經云 因果經は、劉宋の求那跋陀羅譯、過去現在因果經で、佛自ら過去の因地を明かにして、善慧仙人となつて普光如來に散花供養し、當來成佛して釋迦牟尼如來と號すべき印記を受け、次で入胎、出胎、出家、降魔、成道、轉法輪、等に及ぶ事蹟を說いた代表的な佛傳經典。今の引用の前半は、珠林八(:339 b)、及び道宣の釋迦氏譜の要約によるもの(T. 50, 87 a, 88 b)で、恐らく原本第一卷の始めに「過去無數阿僧祇劫のとき、爾の時に一仙人有り、名づけて善慧と曰う」云云以下、「爾の時に善慧菩薩功行滿足して位十地に登り、一生補處に在つて一切種地に近づき、兜率天に生じて聖善と名づく、白して諸天主の爲めに一生補處の行を說き、亦た十方國土に種々の身を現じて、諸の衆生の爲めに隨應說法し、期運將に至つて、當下に作佛せんとす」とある部分(T. 3, 620c-623 a)に當るものであり、後半は前引に續いて、「卽ち五事を觀ず、一つには諸の衆生の熟と未熟とを觀じ、二つには時の至ると未だ至らざるとを觀じ、三つには諸の國土のうち、何れの國が中に處るかを觀じ、四つには諸の種族のうち、何れの族が貴盛なるかを觀じ、五つには過去の因緣の、誰か是も眞正にして應に父母と爲るべきかを觀ず、五事を觀じ已りて、卽ち自ら思惟すらく、今諸の衆生は皆な是れ我が初發心以來、成熟する所の者にして、淸淨妙法を受くるに堪能せり、此の三千大千世界に於て、此の閻浮提迦毘羅施兜國は最も中に處ると爲す、諸族種姓に釋迦は第一なり云云」とあるを取つたものであろう。善慧菩薩は 隋の闍那崛多譯、佛本行集經では雲童子と云われ、他の古い本起系の經典で、布髮掩泥の故事で知られる儒童菩薩、卽ち摩衲仙人(Mānava)に當り、普光如來は定光佛、卽ち然燈佛である。善慧の名は後には陳の傅大士の稱として知られるが、彼が苦行七年宴坐の際に、釋迦、金粟、定光の三佛を見、又松山に行道して、七佛が前に引導し、維摩が後に接するを感見したという傳說(傳燈錄の卷首)が示すように、善慧大士の名そのものがすでにこれらの本起經によるのである。但し、忍辱の名は、因果經その他の經典にも、釋迦氏譜にも見えぬから、或は金剛經に見える忍辱仙人 Kṣāntivādin の話などから取られた禪門の獨創かも知れない。

又、果位の名としての聖善は、因果經及び釋迦氏譜に共に傳えるが、護明菩薩の名は隋譯の佛本行集經の所說で前者には見えぬ。佛本行集經六十卷は、隋代闍那崛多の譯で、佛傳中尤も大がかりで詳細なるもの。過去因位に轉輪聖王たりし時、値遇した三十億同一名號の釋迦如來等の諸佛の系譜、及び賢劫王種の王統を述べた後、上昇兜率、乃至、初轉法輪以下半生の敎化活動を語るもので、特に律藏傳持の各部に傳えられた佛傳を、大乘的立場より綜合しようとする意圖をもつもののようである。

祖堂集の佛傳が、多くの資料を道宣の釋迦氏譜に承けつつ、道宣が用いなかつた本經を重視していることは注意してよいであろう。

故本起經云　本起と名づける經典としては、佛說太子瑞應本起經、及び修行本起經の二部が現存する。前者は吳の支謙譯、後者は後漢の竺大力、康孟詳の共譯である。引用は瑞應本起經で、迦維羅衞は、三千日月、一萬二千の天地の中央なり、佛の威神は至尊至重にして邊地に生るべからず、地傾邪せるが爲めに、故に其の中に處り、周ねく十方を化せんとなり、往古の諸佛の興るも、皆な此に出づ（T. 3, 473 b）とあるのに當るが、直接には前の因果經の引文に續き、釋迦氏譜（：87 a）を承けたものであろう。珠林八もまた同じ文を引き、瑞應經に云く、と明記している。（：333 c）。迦毗羅の語義は、すでに七佛章に注した如くで、中村元博士の「ゴータマ・ブッタ」によると、北緯二十七度三十七分、東經八十三度八分であると云う（p. 29）。

倶舍論云　この文も引き續き釋迦氏譜によるもの。剎浮は、Jambū の音寫で、普通には閻浮提（Jambū-dvīpa）、又は贍部提などと云われ、ジャンブー樹の繁つている洲の意。dvīpa は島のこと。須彌山の南にあるから南閻浮とも稱する。狹義ではインドを中心とする世界のこと。音寫の由來については宇井博士の前掲書（p.75）に說がある。剎浮は眞諦三藏の舊譯で、釋迦氏譜には、又倶舍論に云く、剎浮洲の中に（此の洲は、或は閻浮、剎浮、剎部と名づけ、皆な音を取ること同じからず）、金剛座有り、上は地と齊しく下は金剛輪際に至る、此の座有るを以て菩薩は之に坐し、金剛定に入り覺道を成ずることを得たり、此の座を除く外の地は則ち堪えず云云（：87 a）とあり、眞諦の阿毘達磨倶舍釋論卷第八、中分別世間品之三（T. 29, 215 a）に、殆んどこれに等しい文章が見られる。從つて、迦迦羅國が剎浮洲の中央なるかの如く讀める祖堂集の本文は、全く引用を誤つたものというべきである。

山海經云　以下もまた釋迦氏譜（：87 b）を承けたもの。山海經は、禹王、又は伯益の作と云われる中國の地理書で、もちろん後人の僞作であるが、漢の司馬遷がすでに引用しているから、古い傳承をもち、東晉郭璞（276–324）が注したものが傳えられ、現存十八卷である。身毒は、インドの古稱で Sindhu の音寫。Sindhu は、インダス川のことで、大きな河の意と云われる。西域記二に、夫の天竺の稱を詳かにするに異議紛紜たり、舊には身毒と云い、或は賢豆と云う、今正音に從えば宜しく印度と云うべし（T. 51, 875 b）とあり、賢豆は Hindhu、又は Hindu、印度は Indu の音寫で、Sindhu の S が、ペルシア語、及びギリシア語化されて、H及びIに轉訛したものという（宇井博士、前掲書 p. 71）。軒轅氏は、本來は黃帝を指すが、ここでは中國の傳說で窮山の際に在るとされた海外の支配者・國名を云うこともある。次の文に、中天大夏とある大夏も、禹王の樂の名であるとともに、傳說上の外國の名で、中國の西南方にあるとされていたようであり、釋迦氏譜は、今以るに剎浮の一域は中に葱嶺に分つて、西を大夏と號し、五竺焉に統ぶ（：87 b）とある。郭璞は東晉の卜筮家で、博學高才、詞賦に聞え、元帝に侍えて著作郎となり、後、王敦の記室參軍となつた人。山海經の他、爾雅、方言、楚辭等に注し、洞林、新林、卜韻、等の作があり、晉書七十二、神仙傳九、に傳がある。釋迦氏譜は彼の圖贊の文をも引いている（：87 c）。

中天大夏種姓有四……　此も釋迦氏譜による引用文。卽ち、氏族の根源を序する條に、

夫れ姓氏の興るは、もと其の質を召さんと欲してなり。故に物類に從い其の形に命じてこれに名ずく、たとえば、東夏の姓の源は、本惟だ九有り、故に云う、或は謚號に因れば、唐虞文武等是れなり、或は爵封に因れば、王侯宋衛等是れなり、或は官字に因れば、司馬司徒、伯仲叔季、等是れなり、或は居處に因れば、則ち城郭園池、或は事有に因れば、則ち陶丘巫卜、或は任職に因れば、則ち三烏五鹿、末裔務めに隨って流廣滋いよ彰し、卽ち目して自ら形づくる、繁述するを勞せず、太夏の種姓は四の不同有り、謂く、刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀羅なり、刹利王種は最も高貴と爲す、劫初以來、相承して絕せず、餘の三姓は此に論ずる所に非ず、但だ佛の姓を明かさば、自から五別を分つ、一に曰く瞿曇、二に曰く甘庶、三に曰く釋迦、四に曰く舍夷、五に曰く日種なり（：85a）。

と云い、以下、五別の一一について經典を擧げて說くのであるが、これによって明かなように、祖堂集が因果經に云く、というのは誤りで、元來、因果經には四姓の說はみられないし、又、但だ三姓を明かさば自から五別を分つ、と言い乍ら、以下に五別について何の說明も加えぬのも稚拙である。然し祖堂集は、この引文をまくらとして、以下に於て主として四姓のうちで、刹利王種が最も高貴である所以と、佛陀の姓のうちの釋種について經證を擧げつつ筆を進めて行く。

四姓はいうまでもなくインド個有の社會觀の代表的なもので、一般にはバラモンbrāhmana（僧職階級）、クシャトリヤ Ksatriya（王族階級）、バイシャ Vaisya（商人階級）、シュードラ sūdra（賤民階級）の四とされ、此の四階級は太古のときに原人の口と兩臂と、腿と兩足より生れたもので、貴賤の別は先天的に定っていると考えられた。然し佛陀は、

世に名とし姓として附せられているものは、通稱にすぎない、（人の生れた）その時々に附せられて、かりに設けられているのである、（姓名はかりに附せられたものにすぎないということを）知らない人々にとっては、誤った先入見が長い間ひそんでいる、知らない人々はわれらに告げていう、「生れによってバラモンなのである」と、生れによってバラモンなのではない、生れによって非バラモンなのでもない、行爲によってバラモンなのである、行爲によって非バラモンなのである、行爲によって農夫なのである、行爲によって職人なのである、行爲によって商人なのである、行爲によって傭人なのである、行爲によって盜賊でもあり、行爲によって武士でもある、行爲によって祭官でもあり、行爲によって王でもある（中村元譯、スッタニパータ、六四八―五二）。

という有名な聖句によって知られるように、四姓の先天的區別を否定し、人格的價値の平等なることを主張し、「如來の所に於て鬚髮を剃除し、三法衣を著けて出家學道せば、復た本の姓なく、但だ沙門釋迦の子なりと言わん」（增一阿含二十一）、とした。そ

して、多くの阿含經典は四姓の順序を變更し、刹利、婆羅門、居士、首陀羅、として、釋種の出である刹利を婆羅門の上に置いて居るが、いま祖堂集が「刹利王種は最も高貴と爲す」と云うのも、次に引かれる長阿含の小緣經や、阿摩晝經によるもので、特に後者に相當するパーリ長部の Ambaṭṭhasutta には、釋迦族は主人より出で、婆羅門は家僕の女の子孫である（南傳 6, 137）、とさえ云つて居り、如何にもインド個有の四姓の階級觀の根强さを物語るものであるが、むしろ佛教經典に見える如き、刹利種を最高とする四姓說は、古いバラモン階級の覇權が衰えて、反バラモン系の思想家たちの社會觀が勝利を占めるに至つた時代のもので、此の派の社會觀を神話的にまとめたものが、次述の小緣經や、阿摩晝經の物語で、本書が、切初以來相絕して終えず、とするのもそれであると考えられようが、今、此の問題そのものに深入りすることはできない。

又長阿含經云　以下、四姓の由來、釋種の起り、などを說く一段である。資料は前段に續いて釋迦氏譜を承け、長阿含六の小緣經（T. 1, 37 b）に據るもの。小緣經は、パーリ長部二十七の Aggaṅña Suttanta（南傳八に、久野芳隆氏の國譯、起世因本經がある）に相當し、中阿含三十九の婆羅婆堂經（T. 1, 673 b）、及び宋譯の白衣金幢二婆羅門緣起經（T. 1, 216 b）も同本である。佛が舍衛國淸信園林鹿母講堂上を經行のとき、婆悉吒 Vāseṭṭha、及び婆羅墮 Bhāradvā の二靑年に對して、人間の貴賤高下が四姓の別によらぬことを敎え、更に四姓の本緣と天地の始終を說かれたもので、長阿の小緣とは四姓の本緣の意であり、中阿の婆羅婆堂は Bhāradvāja の音寫、別譯の白衣金幢は夫々二婆羅門靑年の名の意譯である。又、前引のスッタニパータ648-52を含む大品第三のヴァーセッタ章も、恐らく其の最も古い形の關係資料であり、增一阿含三十四の七日品の第一經（T. 2, 735 b）の後半や、後引の大樓炭經、及び同本の長阿含十八以下の世記經、別行の起世經、起世因本經、などにも、それらの末尾に同一の關係資料が見られる。Aggaṅña は、lokupatticariyavāṅsa の意とされ、「世界の起源」（南傳 8, 45）、「原人」（同 119）などと譯されるように、何れの民族神話にも共通して見られる天地開闢の物語であるが、今それが刹利王種の由來につながり、釋種の起源に結ばれてゆくところに特色をもつ。引用は先づ成住懷空の四切が盡きて、次の成切が始まる部分で、もとの長阿含小緣經のまま出すと、

　切盡きて壞する時、衆生は命終して皆な光音天に生ず、自然の化生にして念を以て食と爲す、光明自から照し神足もて空を飛ぶ
　……光音の諸天は福盡きて命終し、此間に來生し、此に來生すと雖も猶お念を以て食とし、神足もて空を飛び、身光自から照して此に住すること久し、各自に稱して衆生衆生と言う（T. 1, 37b-c）

と云い、原始の衆生の意味を明かにしている。光音天 Ābhassarādevā は、輝ける天の意で、これが原人の故鄕であるが、一般には色界第二禪天のことで、語らんとする時に口より淨光を發して言語の用をなす故に、光音と云うとされる。又、增一阿含三十四の七日品では、光音天が地上の地味の蒲桃酒の如くなるを見て欲心を起して降下し、これを多く食つたものは身體の重みで飛行

できなくなつたとし、福盡下生の意味が多少異つて説かれている。次に、歡喜爲食は、小緣經では以念爲食で、念食に相當し、いわゆる出世間の五食の一であり、後の摶食 Kabalin は、世間四食の内でも、欲界繫に屬するもので、上界の念食とは質的な相違があるとされる。出世間の五食、及び世間の四食の説は、同じく增一阿含四十一の第四經に、拘留尊佛の説として、

夫れ食を觀ずるに九事有り、四種人間食と五種出人間食となり、云何なる四種か是れ人間食とならば、一つには揣食、二つには更樂食、三つには念食、四つには識食なり、是を世間に四種の食有りと名づく、彼の云何なるかを名づけて五種の食の世間の表に出づると爲すや、一つには禪食、二つには願食、三つには念食、四つには八解脫食、五つには喜食、是を謂いて名づけて五種の食となす、是の如く比丘よ、五種の食は世間の表に出づ、當に共に專念して四種の食を捨除し、方便を求めて五種の食を辨ずべし (T. 2, 772 b)

とあり、これによると、念食は世間にも出世間にも共に有る如くであるが、世間の念食は、增一阿含二十一苦樂品の第四經には、彼の云何なるを名づけて念食と爲す、諸の意中に念想する所、思惟する所、或は口を以て說き、或は體を以て解し、及び諸の所持の法、是を謂いて名づけて念食と爲す (T. 2, 656 c) と云い、別に意思食とも呼ばれるものであり、出世間の念食は、常に諸佛を念じて心口相應するものとされて、質的な相違があるのであり、祖堂集が、念食を出世間の法喜食の意に改め、歡喜を食と爲すとしたのは、明かに此の相違をより一層强調しようとするもので、恐らくは觀心論 (少室六門の破相論) に、

食に五種有り、一つには法喜食、謂う所は如來の正法に依つて歡喜奉行するなり、二つには禪悅食、謂う所は內外澄寂、身心悅樂なるなり、三つには念食、謂う所は常に諸佛を念じて心口相應す、四つには願食、謂う所は行住坐臥に常に善願を行ず、五つには解脫食、謂う所は心常に淸淨にして世塵に染まざるなり (禪門撮要上 p. 41)

とあるものなどに據つたのではなかろうか。

次に自然地味は、パーリ起世因本經では、rasa-pathavi で、「煮沸したる牛乳の粥の、將に冷えんとして表面に於て泡を生ずるが如く〔大地は〕發現したり、かの地は色を具し、香を具し、味を具したり、そは恰も完全なる醍醐、或は純粹なる乳酥の如き色を呈し、又混りなき蜂蜜の如き味あり」(南傳、8, 104)、と云われ、原人の欲望が惹き起される根元物質の如きものである。小緣經では最初に生じたものを甘泉、次に自然地肥とする。地肥は地皮と同一であろうが、原語は恐らく bhūmipapataka で、久野芳隆氏が玄奘の俱舍論や宋譯の白衣金幢二婆羅門緣起經に依つて、地餅、又は地膏と譯されているものであり、本來は「牛乳と米とを混じて煮、之を團子の如くなしたる食物」(同120) であると云われ、大樓炭經は薄餅 (T. 1, 307 c) と譯す。

次に林藤粳米は二種で、林藤は小緣經には之を缺くが、婆羅婆堂經は、地肥が滅したる後に婆羅を生じたとし (: 675 a)、大樓炭

經は婆羅味とする。婆羅は大正藏經が注しているように Badālata の音寫であり、P.T.S. の辞典は、a beautiful creeper of sweet teste とする。南傳の譯者は此によつて蔓草と譯すが、起世因本經は、

地皮復た沒して便ち林蔓を生ず、形色成就し香味具足すること、譬えば成就せる迦藍柯花の如く、是の如きの色有り、之を割れば汁流れ、猶お無蠟の蜜のごとし (T. 1, 416 c)

と云い、玄奘の俱舎論は、地餅復た隱れて、爾の時に復た林藤の出現する有り、競い耽つて食うが故に林藤復た隱れて、耕種するに非ざる香稻の自から生ずる有り (T. 29, 65 b) と云つて、林藤の譯語を使つている。然るに、梁の僧祐の釋迦譜は、

樓炭經に云く、地肥生ぜずなりて更に兩枝の葡萄を生ず、其の味亦た甘く、久々に食すること多くして共に相い形笑す、兩枝の葡萄生ぜずなりて更に粳米を生ず、後に自然粳米有り、糠糟有ること無く、調和を加えずして衆の美味を備う、衆生之を食して男女の形を生ず (T. 50, 1 c)

と云い、此の文は今日の大樓炭經に見ることができないが、古く兩枝の葡萄と見られていた樣で、後代の佛祖統紀の著者は、林藤を注して特に「樓炭經には兩枝葡萄と云う」(T. 49, 298 c) としている。いづれにしても此が古代原人の分別抗爭と妄想執著を惹き起した「智惠の實」であつたに違いない。P.T.S. 辭典の編者がエチモロジーを加えて Padālatā とし、"destroyer" とするのは勿論蔓草についてであるが、此の葡萄は遂に人類の destroyer と化すべき禁斷の木實であつたのである。

樓炭經云　前引の僧祐の釋迦譜を承けた釋迦氏譜に據る引用。樓炭經は、西晉の法立と法炬の共譯とされる大樓炭經六卷が現存し、道安錄にはすでに竺法護が太安元年に譯した五卷のものがあつたとし、費長房は、或は六卷、又は八卷とも注しているが傳わらない。此の經典は、前述したように長阿含卷十八以下に收められる世記經の別本で、後代に別譯された起世經十卷（隋闍那崛多等の譯）、起世因本經十卷（同じく隋の達摩笈多の譯）も同一テクストである。樓炭は、Loka-upapatti の音寫で、世界の起りの意。世記、起世、起世因本、等はその意譯であり、前記の阿含の小緣經や、婆羅婆堂經と類似の部分を持つている。然し此等のテクストは、このままの形ではパーリ大藏に相當經なく、主として北傳系の部派で傳持される間に種々の變化增廣を遂げたもののようで、有部系の立世阿毘曇論十卷（陳の眞諦譯）や、元代沙羅巴譯の彰所知論二卷も同傾向のものであり、敦煌僞經の妙法蓮華經馬明菩薩品第三十の末尾には、大樓炭經一百二十卷は廣く世界中の事を明すも、大經見難し (T. 85, 1431 b) とも云うから、當時この經典に擬した僞妄のテクストが存在したらしい。處で、僧祐の釋迦氏譜は、樓炭經に本づいて、原始人たちが自然粳米を食つたために男女の形を生じたと説き、更に增一阿含によつて、彼等が互に情欲を行ずるために屋舍を造り、夫妻共住によつて胎生の習慣ができたとし、再び樓炭經によつて、

後に稍著する所有つて、便ち將に（麗本は特）童女と夫と、歌舞笑稱して願つて夫婦と爲り、當に安隱ならしむ、爾の時先づ瞻婆城に造り、乃ち一切の城郭に至る、自然の粳米は朝に刈れば暮に熟し、暮に刈れば朝に熟し、刈る後に隨つて生じ（中阿含に曰く、長は四寸と）未だ莖幹有らず（T. 50, 1c）

と云つているが、現存の大樓炭に照合すると、冒頭から、當に安隱ならしむ、までが經文に相當し（T. 1, 308a）、爾の時先づ以下の文はこのままの形では見當らない。恐らく此等の後半の文章は、僧祐が增一阿含からとつた取意の文であり、釋迦譜のテクスト自體に於ても、宋元明宮の四本が、樓炭經に云くから、當に安隱ならしむ、に至るまでを夾注にしているように、本來は前引の增一阿含に云くの一段に直續するものであつたのであろう。自然粳米云云の一條のみを抽き出して、樓炭經の文とした道宣、及び道宣をそのまま承けた祖堂集の文章は、孫引による孫引の資料が如何に當てにならぬかを知らしめる好例と云うべきであろう。いづれにしても、自然粳米は自然生えの稻のことで、謂わゆる「稻の祖先」であり、林藤の後に出現した原始人の食物であるが、俱舍論が云うように、

此の食は麁なるが故に殘穢身に在り、蠲除せんと欲するが爲めに便ち二道を生ず、斯に因つて遂に男女の根の生ずる有り、二根の殊なるに由つて形相も亦た異なり、宿習力の故に便ち相い瞻視し、此に因つて遂に非理作意を生ず、欲貪の鬼魅、身心を惑亂し、失意の猖狂、非梵行を行じ、人中の欲鬼、初めて此の時に發す（T. 29, 65b）

とされ、男女の煩惱が發生する機緣となると共に、「耕さざるに熟する米」、又は「耕種に非ざる香稻」としての自然採取より夫婦共力による勞働生產社會への發展を促し、富の畜積と競爭相奪を經て、遂に契約としての民主の誕生、つまり刹利王種の起源となるのである。言わば素朴な原始共和社會の成立と、最初の民主王としての釋迦族の祖先の物語に移つてゆくわけである。

中阿含經云　中阿含三十九、婆羅婆堂經を指すが、經文は、前條の僧祐の釋迦譜が註として挾んでいるように、「長四寸」の三字のみであり（T. 1, 675a）、人競預取以下は道宣の釋迦氏譜の文であり、之を直ちに中阿含經の文中に含ましめたのは祖堂集の罪であり、而も、釋迦氏譜の如此相敎を如是相殺と改めているが、道宣が本づいた僧祐の文章は、三本及び宮本では效であり、この文字が尤も通じやすい。處で、釋迦氏譜は、續いて僧祐の語（：1c）を引いて次の如くに云う、

祐律師云く、澆風既に動いて則ち淳源斯に謝し、精靈通感すれば則ち鏗擊も遲しと爲す、竊かに承るに、兩漢の日、東萊租を加えて海魚潛かに泳ぎ、合浦賦を增して玃蜂遠く移る、近を以て古を方るに逾符契うこと有り、粳米を生ぜざることは未だ異疑するに足らず（：85c）。

長阿含經云　以下も全く釋迦氏譜によるもの。小緣經には、近似の記事はあるが、このままの文章を見出し得ない。而も、釋迦氏譜

に遂有自藏。己米。盜他田穀とあるのを、祖堂集は、其有自藏。以來。盜他田穀とし、由是事。起を由是諍起、威嚴肅。物を威嚴鞠。物と改める。

樓炭經云　同じく釋迦氏譜を承けた引文。以取。租故名刹利を、以法。取。祖故名刹利に誤つて居り、祖は不可である。又、此譯田地主也は、本來は釋迦氏譜の夾註で、「唐には刹利を譯して名づけて田地主と爲す、初め地を分ちし日、、各諍訟有りしを以て、乃ち此の主を立つ」(：85 c)とあるを略したもの。但し、唐を、明本では此に作る。諡は、諡の本字で、死者生前の行迹によつて、死後に贈られる名。古く、諡と諡を別字としたが、段玉裁の說以後に同一とみられるに至つたと云う。但し、異說もある(諸橋大漢和辭典による)。

時閻浮提天下富樂　以下もまた道宣が釋迦譜から孫引する樓炭經の文で、嚴密には、互いに相い崇敬すること猶お父子の如し、までが經典の文、是くの如くに漸く減して今の百年に至る、までが僧祐、先に劫初に創始して王と爲りてより以下は、道宣に本づく取意である。此の前後の內容は、比較的現在の大樓炭經に合するから、先づ原文を擧げると、

已に卽ち自ら事を訟うを見て、衆人便ち共に議るらく、當に何の所にか賢者を得て、共に立てて君長と爲し、爲す所を典主せしめ、我等が作す所は、其に從つて決を取らん、若し非法を作す者有らば當に之を誅罰すべし、我等が種うる所の粳米は、各各當に共に衣食を輸るべしと、爾の時、彼の衆會の中に一人の最も大尊にして端正殊好、威神巍々たるもの有り、衆人便ち其の人に白すらく、當に我等が典主と爲りて君長の爲す所を作せ、其に從つて言敎を受け、若し非法を作す諸は卽ち當に之を誅罰すべし、我が曹種の收むる所の粳米は各々供して君が衣食に給せんと、是の人卽ち言諾して、便ち共に立して君長典主と爲し、一切の所爲は其に從つて敎を受け、若し非を爲す者は卽ち之を誅罰し、人の種うる所の粳米は各々共に輸つて典主に入れ、一切を令せしめ、人民は號して大王と曰い、法を以て租を取るが故に名づけて刹利と爲す、是を用ての故に、天下に始めて刹利種起り、天下に有る所の國は皆な大王に屬せり、

時に是の閻浮利地は、地平正にして山陵溪谷無く、荊棘有ることなく、亦た紋虻蚤虱無く、亦た礫石無く、地に明月の珠玉、琉璃金銀を棄捐す、大王の閻浮利天下を治むる時、天下は富樂にして熾盛安穩、五穀は豐かに熟し人民衆多、地には佳好の水も亦た饒多にして、譬えば蘇麻の油を地に塗するが如くに揚塵を起さず、青草を生ずること衆多にして、周匝正圓、其の色は譬えば孔雀の尾の如く、其の香りは華香の如し、柔濡なる綿綖の如く、足もて上を踏めば陷りて地に入ること四寸、足を擧ぐれば卽ち還り復すること故の如く、地に四寸の空缺の處無し、(中略)大王の天下を治めし時、閻浮利に八萬の郡國有りて、人民聚落の、雞鳴に居る者は展轉相聞し、天下に病無し、亦た大いに熱からず亦た大いに寒からず、復た飢渴の人無し、大王は法を以て治行し、十善の事を奉じ、遍ねく天下人民に敎え行わしむること父の子を愛するが如く、天下人民の王を敬ことは子の父を敬するが

如し (T. 1, 368 c)

と云い、此の前後の記述は同種の資料の中で尤も詳細である。處が樓炭經は、此の一段に續いて直ちに大王以下二十五王の系譜に移つて居て、人壽漸減の記事がない。僧祐が何によつて此の記事を加えたのか、もとより判らぬけれども、恐らくは轉輪聖王出現の時期を、人壽無量歳より漸減して八萬歳に至る間と、將來再び漸增して八萬歳(又は八萬四千歳)に至る時、とする長阿含六の轉輪聖王修行經、及び同本の中阿含四十四の第三經 (以上三部のパーリ相當經は、長部二十六の Cakkavatti-sihanāda-suttanta) 等や、過去七佛の年壽を夫々八萬四千歳より漸減して今佛の百歳に至るとする大本經の說などに關係するものであろう。なお、過去の聖王が奉行したとされる十善は、いうまでもなく、不殺生、不偸盜、乃至不邪見の、身三口四意三の十戒で、本來は在家佛敎徒の守るべき德目として阿含經典に廣く說かれているものであり、後に大乘佛敎が興起すると、更めて出家在家を一貫する菩薩戒の基本精神と見られて、新しい十戒の原型となるに至つたものであり、更には、前世で此の十戒を完全に修めた人にして甫めて現世に天子に生れることができるとも信ぜられて、十善天子の稱を生んだものである。

先於劫初　前述のように、道宣が僧祐の記述に加えた文章によるもの。轉輪粟散紹續の相というのは、第三十三王の下に轉輪王が十人出で、夫々の下に更に無數の輪王が出たことを云い、最初の民主王から釋迦佛及び羅睺羅の出家に至つて　刹利の正嫡は遂に絶えたが、他の轉輪王の後胤たちが釋種の血統を紹續しているという意である。軸輪王は、Cakravarti-rājan (cakkavatti-rājan) の譯で、輪寶を轉じて須彌四洲を統治すると信ぜられたインド古代の理想の天子。詳しくは、藤田宏達・轉輪聖王について (宮本博士還曆記念印度學佛敎學論集)、に詳說があり、次の段で更めて考證したい。又、粟散は粟のように無數に散在していること。小さく細かなる意にもいう。

釋迦佛というのは、此の歷史的世界 (賢劫) に入つてから第四番目の佛である。長い世界の歷史は、劫という無限大の時間の單位で語られるが、凡そ三つに區切つて考えられよう。先づ最初の時期は神話の世界(過去莊嚴劫)で、此の時、花光佛より毗舍浮佛 (前記七佛の第三佛) に至る一千の佛たちが表われて次第に成佛を遂げたとされる。中間が賢劫と呼ばれる此の歷史的世界で、拘樓孫佛 (過去七佛の中の第四佛) から樓至如來に至る一千の佛たちが、次ぎ次ぎに成佛を遂げる時期であり、最後の未來星宿劫と呼ばれる自然の世界では、日光如來から須彌相佛に至る一千の佛が表われて

次第の如くに成佛を遂げる筈である。

ところで、此の現在賢劫の始めの頃は、大地の表面に高い香りを發する海水が溢れただよつて、その中に大きな千莖の蓮の花が浮んで居り、第四禪天の冥想の中に在つた梵天の王たちは、此のすばらしい地上の光景を見て、互いにささやき合い、

今や此の地上の世界が固成して、必ずや一千の賢人たちが世に出現するに違いあるまい、

と語つたと云う。それで現在の世界のことを賢劫と名づけるのである。

因果經に據ると、こんなことが書かれている、

釋迦佛が未だ成佛に至らぬ前、因位の偉大な道の修行者であつたとき、彼は〝善慧〟、又は〝辱忍〟と呼ばれていた。その後、修行の功が完全に滿足され、次に必ず佛果に至るべき候補の位置にまで登り、此の世界に生れるべく兜率天に上り、菩薩としての名も改つて〝聖善〟、又は〝護明〟として、多くの梵天たちのために、成佛の直前の段階である補處の修行の法を說き、また十方の世界に思いのままに身を現じて、さまざまの修行の法を說いてまわつた。やがて時運が熟し、すぐにも此の地上に下つて成佛すべき段階に至つたとき、彼は、地上の多くの國々のなかで、どの國が最も中央に當るかと觀察し、その時に迦毗羅國が正しく大地の中心であると知つた、と。

それで、本起經はこう傳えるのである、

佛の偉大な神通の力は、最も尊く且つ重い故に、片よつた土地や、傾いた場所に出生されることはない、と。

いつたい、此の迦毗羅城は、三千大千世界の中央で、太陽も月も天地も、此處を中心として動いて居るのであり、太古以來の諸佛たちも、すべて此の土地から出ているのである。

俱舍論は、此の迦毗羅城を、

剡浮洲の中心である、

と云い、山海經には、

身毒（インド）の國は、軒轅氏の統治するところ、

と云い、同書の郭璞の註には

此處が中天竺である、

と云つている。

元來、此の天竺の國は、東西南北及び中央の五つの國に分れて居るから、中天竺は正しく世界の中心である。その名からもう片よつた國ではなく、中という道理を現しているわけである。

ところで、因果經は云う、

中天竺、卽ち大夏の國には、住民の階級を次の四つに分つ。卽ち、

刹利帝種

婆羅門種

毗舍羅種

首陀種

で、刹利王種が最も高貴の階級とされ、此の世界の始めよりこのかた、づつと連續して斷れたことがない。他の三つの階級のことは、今の問題ではないから觸れぬけれども、若し佛陀が出られた刹利王種の種族について詳說すると、五つの名（瞿曇、甘庶、釋迦、舍夷、日種）がある、と。

又、長阿含經には、次のように云う、

此の世界が始まつた時、未だ太陽も月もなかつた、天上の光明と呼ばれる梵天たちが自己に備つていた福を失つて此の世に降りて來て、皆な化して人間の祖先となつたが、彼等は冥想的な喜びを食物とし、自分の身から發する光明が遠くまで輝き、自由に空中を飛ぶことができて、男女の性別とか、尊卑などという人間的な區別は何一つなかつた。その頃、自然の大地は漸く固まつたばかりで、丁度バターか蜜のような味をもつていた。誰か試みに嘗めた者が有つたために、すぐにつまみ食い（摶食）の風習が廣まつた。そうすると、從來身に具つていた光明や、自然のすぐれた威力が皆失われて、彼等は地上を呼び合いつつ生きることとなつた。食物を多く貪つた者は姿がみすぼらしく、食を節したものは容貌（みめ）うるわしく、身體の不平等はやがて人々に勝負の心を起させた。大地の自然の味が盡きると、今度はひからびた地の皮が出來て、人々は地の皮を食つたために、此の世にあらゆる惡事が群り起つた。更にまた地面から連枝の葡萄や自然の稻などの、多くのすぐれて美味な食物が生み出されて、人々がそれを食つたために、男女の身體的な差別が出來、このようにして、つもりつもつて男女の縁ぐみが起り、ここに始めて人間が胎生することになつた。

その自然生えの稻について、樓炭經は、

自然生えの米は、朝一度摘みとると、その日の夕方にもう次の米が實つた、

と云い、中阿含經には、

稻の長（たけ）は四寸ぐらい、

と云つている。

ところで、人々はわれ先きに此の自然生えの米を競い取つたので、そうするうちに先取りした株からは再び實らぬようになつた。

長阿含經は云う、

それで、人々は最早や再び稻の實がならぬわけを知ると、各自に憂い惱みの心をもつて、お互いに自分の田畑や敷地にさかいを限つて垣根を作つた。一たん彼等が互に自分の米を隱(かく)まうようになると、今度は他人の田畑の穀物を盜む者が出て來て、そのために爭いが起り、決著のつけようが無かつた。

そこで彼等は相談して、一人の男を選出して平等主と名づけ、專ら人々の善事を賞し惡事を罰せしめて、皆でその人に生活の資を供給することとした。

その時、一人の見るからに體つきが大きくすぐれて、威嚴自から人を正し、衆に信伏せられる人物があつた。彼等は出かけて行つて其の人にたのんだ。彼がたのみを受諾したので、此處に始めて民の主という稱が起つた。

樓炭經は云う、

人々は相談して彼に長の號を與え、その死後に至つて生前の功をたたえて謚(おくりな)を與え、何々王と呼ぶことにした。彼は、法に從つて人々から租(みつぎ)として、田地に割當てて收穫の一部を受け取つたから刹利と名づけられたのである。(刹利(セツリ)とは、中国の言葉に譯すと、田地の主の意である)

當時、此のエンブダイ(ジャンブ樹の繁る平原の意)は、天下のすみずみまで富み榮えて平和であり、地面には青草が孔雀の羽根のように密生し、八萬の都市國家は部落相互に音信を通じ、暑さ寒さのうれいや、惡い病氣の惱みなどはたえて無かつた。民主王は正法に從つて世を治め、よく十善を實踐したから、王と人民とは相互に崇め敬い合うこと恰も親子の樣であつた。

その頃、人の一生は極めて長久で、全く計り知ることもできぬ程であつたが、後に他の王の世になつて、彼等が正法を行わなかつたために、人の壽が次第に短かくなつて十千歲(一萬年)くらいになつた。このようにして次第に減じて現

在に至り、人の一生は約百年となつたのである。

さて、世界の始めに、最初に王となつた人から數えて、次から次えと王統を受けついで、菩薩、つまり生身の釋迦牟尼佛と、その子の羅睺羅とに至つて、二人が出家したために、ここに民主王の正系の血すじは絶えたわけであるが、同族中の傍系に當る子孫たちが、今なお王位を嗣いでいるので、血すじが斷絶してはいない。それで、以下に廣く轉輪王と云われる聖天子の無數に近い王統相續の跡を列ね示すことにしよう。